

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第136集

星久保古墳群

(静岡空港横断道路榛原地区)

平成12年度 静岡空港県単独空港整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第136集

星久保古墳群

(静岡空港横断道路榛原地区)

平成12年度 静岡空港県単独空港整備に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県を代表する茶所の一つにあげられる牧ノ原台地、その北東部には島田市と榛原町の境を成す丘陵が広がっている。この丘陵の主稜となる標高約210mの物見塚からは、その名通り四周を眺望することができる。眼下には大井川の流れとその向こうに広がる志太平野を見渡し、東には駿河湾と遙かに霞む伊豆半島を一望する。さらに目を北東に転じれば富士山、北には幾千重にも連なる南アルプスの雄峰を仰ぎ、西と南には緑一面の牧ノ原台地を望むことができる。この丘陵北側には湯日川が、南側には坂口谷川が東流し開析谷と沖積平野を形成している。星久保古墳群は榛原郡榛原町坂口に存在する古墳群で、この丘陵の南斜面に位置し坂口谷川とその沃野を見下ろしている。

このたび、島田市との境を成すこの丘陵上に静岡空港建設が予定され、その周辺整備事業の一環として埋蔵文化財の調査が平成9年度から実施される運びとなった。星久保古墳群は空港建設に伴う横断道路建設予定地内に含まれることが明らかになったため、道路建設に先立ち平成12年度に発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代後期の古墳をはじめ、古墳時代後期と平安時代の集落、近世の遺構と遺物が存在することがわかった。これまで、星久保古墳群が立地する坂口谷川流域は埋蔵文化財の発掘調査が行われていなかった。しかし、茶畠の開墾等によって星久保古墳群の存在は以前から知られ、現地踏査によって19基の古墳の存在が確認されている。今回の調査を行った古墳は現地踏査では知られていない、新規発見の古墳である。また、今回の調査で古墳時代後期と古代末の集落跡を発見したことも、更なる成果である。坂口谷川流域では星久保古墳群の西に古代寺院の存在が伝えられ、北西には鎌倉時代の創建と伝えられる石雲院が存在しており、古くから連續と続く人々の営みの痕跡が残されている。しかし、古墳時代や古代の集落が存在することは認知されていなかった。今回の調査で発見できた集落跡は、この地の歴史に新たな一頁を加えたと言え、地域の歴史を知る上で貴重な資料となるであろう。

終わりに、調査並びに資料整理に御援助、御協力下さった静岡空港建設事務所をはじめとして関係諸機関に感謝申し上げるとともに、現地調査と整理作業に従事した作業員の労をねぎらいたい。

2002年12月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　言

- 1 本書は静岡県榛原郡榛原町坂口字星久保1044-2他に所在する星久保古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、静岡空港県単独空港整備に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡空港建設事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成12年4月から平成12年9月まで現地調査を実施し、平成14年4月から12月まで資料整理を行った。
- 3 星久保古墳群は静岡空港建設予定地内の遺跡である。建設予定地内の遺跡はそれぞれ地点名あるいは地区名がつけられている。当遺跡は横断道路榛原地区に当たる。
- 4 調査体制は次のとおりである。

平成12年度

所長 斎藤忠	副所長 山下晃	常務理事 伊藤友雄
総務課長 杉木敏雄	総務係長 田中雅代	
調査研究部長 佐藤達雄	調査研究部次長 及川司	調査研究二課長 篠原修二
調査研究員 稲垣聖二、勝又直人、菊池吉修		

平成14年度

所長 斎藤忠	副所長 飯田英夫	常務理事 条田徳幸
総務課長 本杉昭一	総務担当 鈴木訓生	
調査研究部長 山本昇平	調査研究部次長 栗野克巳、佐野五十三	
調査研究三課長 篠原修二	調査研究員 菊池吉修	

- 5 本書は調査にあたった職員の所見とともに、調査研究員 菊池吉修が執筆した。
- 6 現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構実測図作成は株式会社フジヤマに委託した。なお、確認調査においては、調査補助業務も併せて委託した。
- 7 遺物写真撮影は当研究所写真室担当職員が行った。金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室長西尾太加二が実施した。
- 8 資料整理にあたり、渋谷昌彦氏に御教授いただいた。
- 9 遺物実測図の縮尺は土器が1/3、金属器、石製品が1/2で統一をはかった。全体図、各遺構図の縮尺はそれぞれの図に明記した。本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。
- SB 壁穴住居跡 SH 掘立柱建物跡 SP 柱穴 SF 土坑
- 10 土層及び土器の色調は、新版『標準土色帳』農林水産技術会議事務局監修1992を使用した。
- 11 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 12 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

目 次

序 例言

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	4

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7
3. 基本層序	11

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺構	
1. 概要	13
2. 古墳時代の遺構	
(1) 20号墳	13
(2) SB-1	18
(3) SB-2	20
(4) SB-3	22
(5) SB-4	24
(6) その他の遺構	24
3. 平安時代～江戸時代の遺構	26
(1) SB-5	27
(2) SF-1	29
(3) その他の遺構	29
(4) SH-1	30
(5) SH-2	32
(6) SH-3	32
(7) SH-4	32
(8) その他の遺構	34

第2節 出土遺物

1. 古墳時代の遺物	
(1) 20号墳と1区・2区の遺構出土遺物	35
(2) SB-1の出土遺物	36
(3) SB-2の出土遺物	37
(4) SB-3の出土遺物	38
2. 平安時代遺構の遺物	
(1) SB-5の出土遺物	38
(2) SF-1の出土遺物	41
(3) 掘立柱建物跡とその周辺の 柱穴からの出土遺物	42
(4) 遺構外の出土遺物	42

第Ⅳ章 まとめ

1. 古墳時代	
(1) 古墳	51
(2) 集落	53
(3) 古墳と集落の関係	56
2. 平安時代～鎌倉時代	
(1) 延穴住居跡	56
(2) 掘立柱建物跡	57
3. 近世以降	57
4. 結語	57

挿図目次

図1 横原町と星久保古墳群の位置	1	図24 3区西側調査区全体図	31
図2 調査区設定図	3	図25 SH-2 実測図	32
図3 遺跡周辺の地形図	6	図26 SH-3 実測図	33
図4 周辺の遺跡分布図	8	図27 SH-4 実測図	34
図5 基本土層柱状図	11	図28 1区・2区出土の須恵器	35
図6 調査区全体図	12	図29 20号墳石室内出土遺物	35
図7 1区全体図	14	図30 SB-1 出土遺物	36
図8 3区東側調査区全体図	15	図31 SB-2 出土遺物	37
図9 20号墳展開図	16	図32 SB-3 出土遺物	38
図10 20号墳展開図（下面）と 遺物の出土状況	17	図33 SB-5 床面の出土遺物	39
図11 SB-1 土層断面図	18	図34 SB-5 覆土の出土遺物	41
図12 SB-1 実測図	19	図35 SF-1 出土遺物	42
図13 SB-1 遺物出土状況図	20	図36 SH-1～4とその周辺の 柱穴からの出土遺物	43
図14 SB-2 実測図	21	図37 1区・2区の遺構外出土遺物	43
図15 SB-2 遺物出土状況図	22	図38 3区・4区の遺構外出土遺物	44
図16 SB-3 実測図	23	図39 周辺の横穴墓・横穴式石室墳分布図	50
図17 SB-3 遺物出土状況図	24	図40 星久保古墳群古墳分布図	52
図18 SB-4 実測図	25	図41 無袖式奥擣り形横穴式石室分布図	53
図19 2区全体図	26	図42 駿河中部～東遠江の 「駿東型の壇」出土遺跡	54
図20 SB-5 実測図	27	図43 駿河中部～東遠江の 「駿東型の壇」変遷図	55
図21 SB-5 遺物出土状況図	28		
図22 SF-1 実測図	29		
図23 SH-1 実測図	30		

挿表目次

表1 作業工程表	5	表6 土器観察表	46
表2 周辺の遺跡地名表	9	表7 20号墳石室計測表	50
表3 鉄鎌観察表	45	表8 竪穴住居跡計測表	50
表4 両頭金具観察表	45	表9 周辺の無袖式奥擣り 形横穴式石室一覧表	53
表5 玉類観察表	45		

図版目次

図版 1 遺跡の遠景

1. 遺跡の遠景（南から）
2. 調査区遠景（東から）

図版 2 20号墳

1. 20号墳から南を望む
2. 20号墳遠景（南から）

図版 3 20号墳

1. 検出状況（南から）
2. 石室検出状況（南から）

図版 4 20号墳

1. 石室東壁（西から）
2. 石室西壁（東から）
3. 石室奥壁（南から）

図版 5 20号墳

1. 鉄製品出土状況（南東から）
2. 石室基底石（南から）
3. 石室掘り方（南から）

図版 6 SB- 1

1. 3区全景（北から）
2. SB- 1 全景（南東から）

図版 7 SB- 1

1. 窟付近遺物出土状況（南東から）
2. 窟（南東から）

図版 8 SB- 1

1. 炭化材の検出状況（北東から）
2. 完掘状況（南東から）

図版 9 SB- 2

1. SB- 2 全景（南東から）
2. 窟（南東から）

図版10 SB- 3

1. SB- 3 全景（南東から）
2. 窟付近の遺物出土状況（南から）

図版11 SB- 4・2区

1. SB- 4 全景（南東から）
2. 2区全景

図版12 SB- 5

1. SB- 5 全景（南から）
2. 遺構北側の遺物出土状況（西から）

図版13 3区西側調査区

1. 3区西側調査区全景
2. SH- 3・SH- 4 全景（東から）

図版14 20号墳・SB- 1 出土遺物

- 1区の主な出土遺物
- 20号墳石室内出土遺物
- SB- 1 出土遺物

図版15 3区東側調査区出土遺物

- 古墳時代竪穴住居跡の主な遺物
- SB-3出土遺物

図版16 SB- 1～3・5 出土遺物

- SB- 1～3 出土遺物
- SB- 5 床面直上の出土遺物 1

図版17 2区出土遺物 1

- 2区の主な出土遺物
- SB- 5 床面直上の出土遺物 2

図版18 2区出土遺物 2

- SB- 5 覆土の出土遺物
- SF- 1 出土遺物
- 遺構外の出土遺物

図版19 2区・3区出土遺物

- 3区の主な出土遺物
- 2区遺構外の出土遺物

図版20 3区出土遺物

- 柱穴からの出土遺物
- 遺構外の出土遺物

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

星久保古墳群は静岡県榛原郡榛原町坂口字星久保に位置する。この遺跡が立地する通称「坂口原台地」は静岡県のほぼ中央を流れる大井川下流右岸に広がる通称「牧ノ原台地」の一支脈であり、榛原郡榛原町と島田市の境をなしている。この台地上に、静岡空港が建設されることになり、静岡空港建設事業の一として、榛原町坂口と島田市湯日を結ぶ空港横断道路の建設も計画された。空港建設予定地内にはいくつかの埋蔵文化財が存在することが確認されている。そのため静岡空港県単独空港整備の一環として、平成9年度から空港建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査が実施されていた。星久保古墳群も空港横断道路榛原地区の建設予定地内に含まれることが明らかになつたので、工事に先立ち調査の必要が生じた。平成11年度に工事の主体者である静岡空港建設事務所と静岡県教育委員会文化課が協議を行い、平成12年度に静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行うことが決定した。

確認調査は平成12年4月に4715.91m²を調査対象面積として実施した。調査区を地形に即して4区に分け、トレンチを設定し調査を実施した結果、1区～3区において遺構の広がりが明らかになった。この結果をふまえ、静岡空港建設事務所と静岡県教育委員会文化課、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が改めて協議を行い、合計2891m²の本調査実施が決定し、引き続き5月から9月まで本調査を行つた。本調査では古墳時代後期の竪穴住居跡を中心とした集落と横穴式石室を主体部とする古墳1基をはじめ、古代の集落と中世～近世の掘立柱建物跡を調査した。資料整理と報告書作成は、平成14年4月から12月まで財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所本部で実施した。



図1 榛原町と星久保古墳群の位置

第2節 調査の方法

確認調査

今回の調査対象範囲は尾根と解析谷が入り組む地形であった。そのため、地形に即して調査範囲を4つの地区に区分した。調査範囲の西から1区とし、東端を4区とした。1区は丘陵斜面、2区～4区は段丘部分と言える。確認調査はトレンチ掘削により実施することになった。確認トレンチは2区～4区では等高線と平行に幅2mのトレンチを2本ないしは3本設定して調査を行った。1区は尾根頂部から谷底に向かって確認トレンチを設定し、さらにそれと直行する方向にトレンチを設定した。各調査区は茶樹を伐採した後、重機によって表土と耕作土を除去した。その後、人力掘削にてトレンチ内の精査を実施した。4区は遺構の発見に至らず本調査の必要なしと判断されたため確認調査終了後、重機を用いて埋め戻しを行った。

確認調査にあたって測量基準点の設置、トレンチ設定図の作成、土層柱状図の作成並びに調査補助員の派遣を株式会社フジヤマに業務委託した。遺構の検出状況、遺物の出土状況は測量基準点を基にトータルステーションを用いて測量を行い記録に残した。トレンチの配置状況は1/1,000を基本とし、遺構の検出状況と土層柱状図は1/20を基本とした。調査状況及び遺構の検出状況、遺物の出土状況は35mm判（モノクロ、カラーネガ、カラーリバーサル）を使用して撮影を行った。

本調査

確認調査の結果1区～3区は本調査の必要が生じたため、引き続き調査を実施した。また、2区と3区の間にも遺構が広がることを確認したので合わせて本調査を行うことにした。この地点を3区西側調査区、確認調査を行った範囲を3区東側調査区と地区設定をした。本調査は重機による表土除去後、人力により遺構と遺物の検出を行った。2区と3区において掘削により生じた廃土は4tダンプを用いて調査区外の土捨て場に搬出した。1区の廃土は場内に仮置きした。

本調査にあたり、基準点の設置及び地形測量、石室実測と空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。石室展開図と遺物出土状況は1/10、その他の遺構実測図は1/20で実施し、地形測量は1/20で図化した。なお、測量基準杭は平面直角座標第VII系に基づいて設定し、1区の古墳はこれとは別に、石室の主軸にあわせて設定した。地形測量及び遺構配置図、遺物出土状況図の作成はトータルステーションを使用した。写真撮影は現地調査では6×7判（モノクロ）と35mm判（モノクロ・カラーネガ・カラーリバーサル）、空中写真撮影は6×4.5判（モノクロ・カラーリバーサル）を使用した。遺物撮影には4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）と6×7判（モノクロ）、35mm判（カラーリバーサル）を使用した。



確認調査の状況



20号墳の調査状況

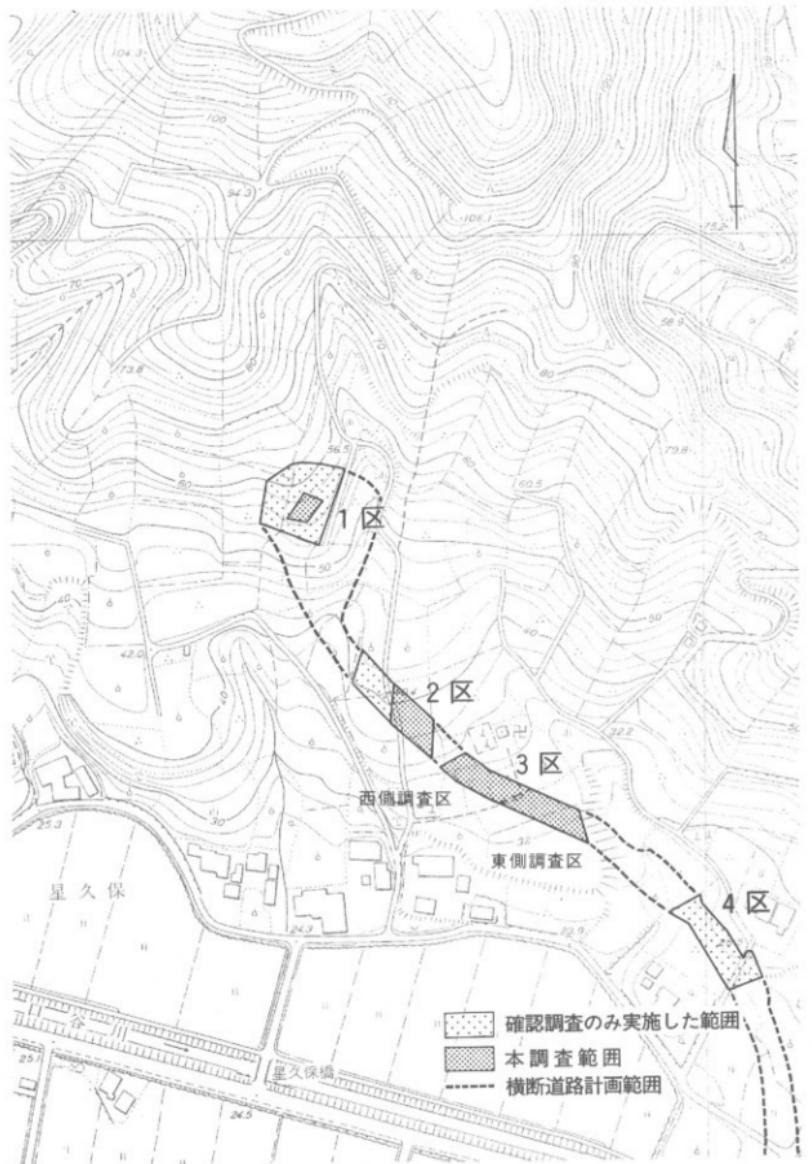


図2 調査区設定図（1/2,500）

第3節 調査の経過

確認調査

平成12年4月第1週から準備作業に入り、資材の搬入やトレーナーの設定を行った。なお、調査に先立つ平成12年3月中旬に静岡空港建設事務所により、調査区内の茶樹の伐採は既に行われていた。重機掘削は4月第2週に調査区東端の4区から着手し、3区、2区、1区の順で4月末まで断続的に行った。人力掘削は4月12日より重機掘削の終了したトレーナーから着手し4月末まで実施した。1区では4月13日に古墳の石室らしきものを検出した。そのため付近を拡張したところ、これが横穴式石室であることが確認できた。2区では4月17日に、3区では4月11日にそれぞれ堅穴状造構になると考えられる造構を検出した。なお、測量基準杭は4月17・18日に設置し、トレーナー設定図作成を4月19日に行った。造構の検出状況は1区を4月24日に、2区と3区を19日に実測を行い記録に残した。また、造構が検出されなかった4区は4月第4週に重機を用いて埋め戻しを行った。4月末に資材の撤収を行い、確認調査を終了した。

本調査

確認調査で造構を検出した1区～3区について、静岡県教育委員会文化課と静岡空港建設事務所が協議を行った結果、本調査の必要があると判断され、引き続き本調査を行うことが決定した。本調査は5月第1週から準備作業に入ったが、空港関連遺跡他地点の工程の都合から重機による表土除去は5月第3週から開始した。重機掘削は1区、2区、3区の順に断続的に行い、合わせて廃土の搬出も行った。人力掘削は5月第3週から開始し、造構実測などを行なながら8月第1週まで実施した。調査は、5月に2区を集中して行い、統いて3区に集中した。1区についても2区と3区と並行して調査を行った。その結果、1区で古墳を1基、2区と3区で掘立柱建物を含む柱穴群と堅穴住居5棟等の存在が明らかになった。6月15日と7月17日には榛原町文化財保護審議委員が来跡し現地を視察した。測量は確認調査時に設置した基準杭を使用し、人力掘削と並行して断続的に行った。各調査区の造構の状況が明らかになった7月19日にはラジコンヘリを用いて空中写真を撮影した。撮影と測量が終了した後、さらに造構を掘り下げた。8月第1週には実測と掘削を終えたので、資材の撤収作業を実施し現地調査をひとまず終了した。

その後、新たに静岡空港建設事務所が本調査対象地の未買取地を取得したため、追加調査をただちに行なうことが決定した。8月第4週に重機掘削と人力掘削を開始した。重機掘削は断続的に実施し9月第1週に終了した。実測や写真撮影と並行して人力掘削を9月第3週まで行った。第4週には実測や撮影が終了したため、資材の撤収を行い、9月末に現地調査を完了した。

なお、現地における整理作業は確認調査、本調査と並行して行い、報告書作成と資料整理作業は他の空港関連遺跡の資料整理作業と並行して、平成14年4月から12月まで当研究所本部にて行った。出土した土器は接合・復原を中心に行い、資料的価値の高いものや特徴的なものを中心に実測作業を実施した。金属製品は汚れや鏽を除去し、保存処理を行った上で実測を行った。また、現地で作成した図面から版下を作成し、トレース作業を実施した。遺物はコンテナに報告書押印番号、登録番号順に収納し、併せて収納台帳を作成した。

表1 作業工程表

平成12年度

確認調査日程表

月 週	4			
	1	2	3	4
重機掘削 (表土除去等)				
人力掘削・精査 (遺構検出等)		—		—
測量			—	—
埋め戻し				—
準備工	—			
撤収工				—

本調査工程表

月 週	5				6				7				8				9			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
重機掘削 (表土除去等)																				
人力掘削 (遺構検出等)																				
測量									(断続的に行う)											
準備工	—																			
撤収工													—							

平成14年度

整理作業工程表

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12
報告書作成・整理作業									

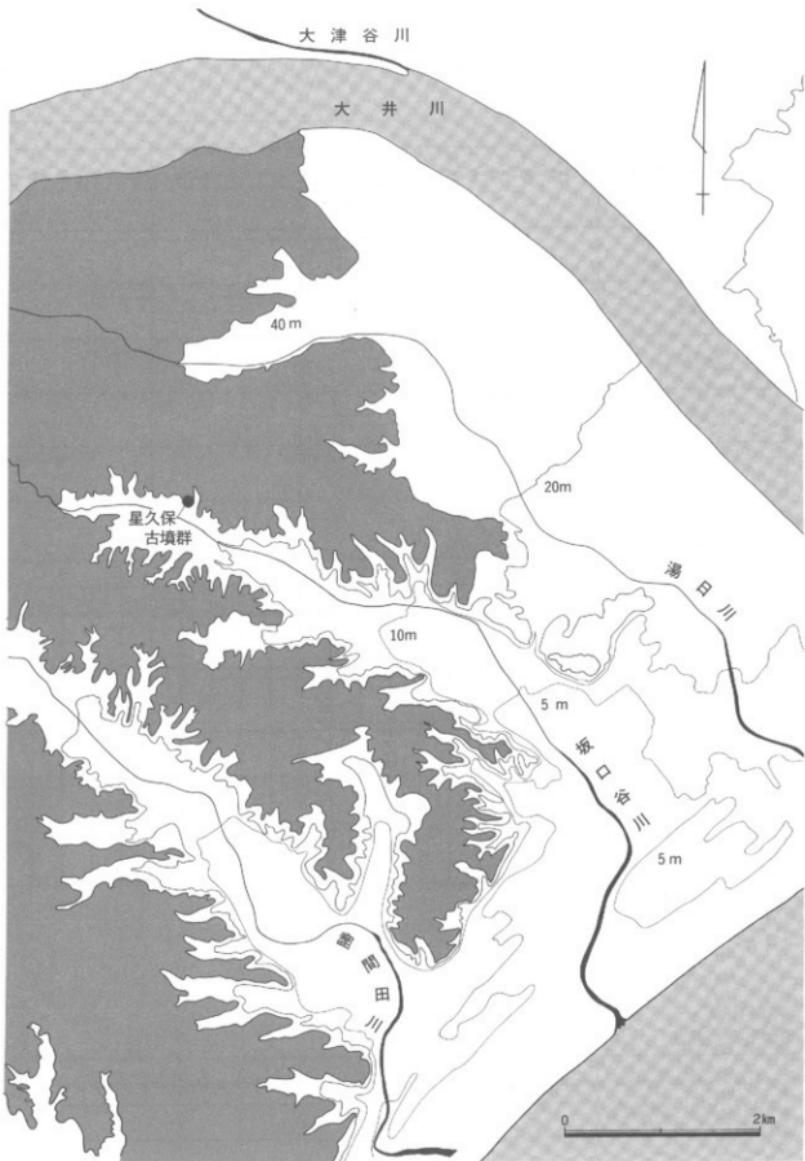


図3 遺跡周辺の地形図 (1/50,000)

第II章 遺跡の環境

1. 地理的環境

静岡県は東西約150km、南北約115kmに渡る広さを持ち、南に駿河湾を抱き太平洋に面し、北は富士山や赤石山脈に代表される山岳地帯となっている。静岡県のほぼ中央には赤石山脈を源とする大井川が流れる。大井川は上流から中流にかけては北から南へ蛇行を繰り返しながら海を目指し、その沖積平野である志太平野の西側に達すると流れを東に向け駿河湾に注ぐ。この向きを変えた大井川の右岸には通称「牧ノ原台地」が広がる。牧ノ原台地の北東部では北から順に湯日川、坂口谷川、勝間田川が東流している。三川とも流域に開析谷と沖積平野を形成し駿河湾に至る。坂口谷川と勝間田川の流域を中心に、西は牧ノ原台地、東は駿河湾に面している町が榛原郡榛原町である。榛原町の北端で島田市との境を接するのは坂口地区である。坂口地区はその中央部を坂口谷川が西から東へ流れ、南北両岸に狭いながらも沖積平野が形成されている。坂口谷川北岸の「坂部原台地」斜面、字坂口・星久保・堂ヶ谷に星久保古墳群は存在している。その位置は、JR島田駅より南南東に約5km、東名吉田インターチェンジより西南西に約3.5kmの距離である。

星久保古墳群が存在する坂部原台地を含め、牧ノ原台地一帯は大井川の堆積物が長い年月をかけて隆起した地形であり隆起扇状地と呼ばれている。牧ノ原台地は掛川層群・相良層群を基盤に小笠・坂部原疊層・古谷泥層・牧の原疊層・色尾・長者原段丘群疊層の順で層位が形成されている。今回調査を行った地点は約30万年前に堆積した坂部原疊層により構成される段丘上にある。大井川の堆積層であるため地山には円礫が多く混ざる。この隆起扇状地は風雨にさらされ、至る所に開析谷が形成されている。星久保古墳群が存在する坂部層群は比較的古く位置づけられる堆積層であるため、特に浸食が進み発達した開析谷が存在している。調査区は台地斜面を北西から南東に斜めに横切る様な形で存在する。2区～4区は標高約30～40mであり、この付近は坂口谷川が形成した沖積平野より一段高く、段丘状を呈している。この段丘上には狭小ではあるが平坦面が広がり、開析谷が3区と4区を区分している。2区と3区は同一段丘上に位置するが、2区は3区よりさらに一段高い段丘上に存在し、その比高差は約5mである。1区と2区の間は坂口谷川に続く発達した開析谷が存在する。1区は標高約60mで、坂部原台地の斜面に立地している。現在、遺跡の周辺は茶畠や果樹園が広がり、沖積平野と斜面との傾斜変換点には集落が広がっている。

2. 歴史的環境

星久保古墳群が存在する坂口谷川流域では遺跡の存在が少なからず確認されているが、現状では発掘調査が行われた遺跡は少ない。一方、南側の勝間田川流域や北側の島田市に属する湯日川流域では発掘調査が実施され、成果が公表されている遺跡が数多い。そこで、上記の地区に存在する主立った遺跡も視野に入れ、坂口谷川流域を中心に地域の歴史について遺跡を主眼に据え、その概略を見ることにする。旧石器時代

まず、旧石器時代の遺構・遺物であるが、榛原町側にはこの時期の遺跡は確認されていない。島田市側では青木原遺跡(75)、原ノ平遺跡(5)、宮裏遺跡(76)などの湯日川と大井川に挟まれた台地上の遺跡でこの時期の遺物が出土している。これらの遺跡の存在から、今後、坂部原台地を含めた榛原町の丘陵上にもこの時期の遺跡が発見される可能性は否定できない。



図4 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

表2 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	里久保古墳群 (今回調査)	古墳時代、古代、 中世、近世	古墳 集落	39	岡田原Ⅰ遺跡	縄文時代	散布地
				40	水掛渡遺跡	社寺	
2	東鎌塚原遺跡	縄文時代中期	集落	41	9 TEE古墳	古墳時代	古墳
3	本村原遺跡	縄文時代	散布地	42	六ツ塚古墳群	古墳時代	古墳
4	本村原古墳群	古墳時代	古墳	43	岡田原Ⅲ遺跡	縄文時代	散布地
5	原ノ平遺跡	縄文時代	散布地	44	宮裏中原古墳群	古墳時代	古墳
6	半段遺跡	縄文時代	散布地	45	岡田原Ⅱ遺跡	縄文時代	散布地
7	東黒宮遺跡	縄文時代	散布地	46	竹林寺魔寺	古代	社寺
8	えびす森遺跡	縄文時代	散布地	47	六ヶ谷瓦窯	古代	古窯
9	原ノ平古墳群	古墳時代	古墳	48	南原古窯	古代、中世	古窯
10	大原遺跡	縄文時代	散布地	49	稻荷山古墳	古墳時代	古墳
11	沼伏原古墳群	古墳時代	古墳	50	水ヶ谷經塚	近世	經塚
12	色尾原遺跡	縄文時代	散布地	51	海戸遺跡	縄文時代	集落
13	尼沢遺跡	縄文時代、古墳時代～ 近世	散布地	52	神ノ舞古墳	古墳時代	古墳
14	宮上遺跡	縄文時代、古墳時代、 古代	散布地	53	淨雲寺古墳群	古墳時代	古墳
15	敷瀬神社經塚	中世	經塚	54	入道ヶ谷古墳	古墳時代後期	古墳
16	谷口原遺跡	縄文時代	散布地	55	清水山古墳群	古墳時代	古墳
17	谷口原古墳群	古墳時代	古墳	56	宮下遺跡	弥生時代～中世	集落
18	五輪塔遺跡	弥生時代	散布地	57	辻川遺跡	弥生時代	散布地
19	高根森古墳群	古墳時代	古墳	58	辻川古墳	古墳時代	古墳
20	鶴ヶ谷古墳群	古墳時代	古墳	59	香齋古墳群	古墳時代後期	古墳
21	鶴ヶ谷南古墳群	古墳時代	古墳	60	鳥子山古墳群	古墳時代後期	古墳
22	地蔵原遺跡	縄文時代、弥生時代	散布地	61	中ノ沢古墳群	古墳時代後期	古墳
23	沼伏神社遺跡	縄文時代	散布地	62	伏方古墳	古墳時代後期	古墳
24	松ノ木原遺跡	縄文時代、弥生時代	散布地	63	稚之助星敷古墳群	古墳時代	古墳
25	沼伏古墳	古墳時代	古墳	64	袖ヶ谷古墳群	古墳時代	古墳
26	沼伏遺跡	古墳時代	祭祀	65	智生山古墳群	古墳時代	古墳
27	船山古墳	古墳時代	古墳	66	勝田神社前遺跡	縄文時代、中世	散布地
28	長軒屋遺跡	弥生時代	散布地	67	向笠古墳	古墳時代	古墳
29	湯日城	近世	城館	68	智生山古墳群	古墳時代	古墳
30	椎現様御陣場	近世		69	智生寺經塚	近世	經塚
31	朝陣場古墳	古墳時代	古墳	70	庄内城	中世	城館
32	作寺古墳	古墳時代	古墳	71	中原遺跡	縄文時代、古墳時代、 古代、中世	集落
33	王屋敷寺院	古代～中世	社寺	72	坂口千頭ヶ谷古墳	古墳時代	古墳
34	里久保古墳群	古墳時代	古墳	73	水掛渡D古墳群	古墳時代	古墳
35	水掛渡C古墳群	古墳時代	古墳	74	吉峰遺跡	縄文時代、古墳時代	
36	水掛渡B古墳群	古墳時代	古墳	75	青木原遺跡	縄文時代、古墳時代、 古代、中世	集落
37	水掛渡A古墳群	古墳時代	古墳	76	宮裏遺跡	縄文時代、古代、中 世、近世	集落
38	庚申塚古墳	古墳時代	古墳				

縄文時代

縄文時代になると確認されている遺跡の数が増える。坂口谷川流域で最も古く位置づけられる遺跡はこの時期の海戸遺跡(51)である。勝間田川中流域では、勝田神社前遺跡(68)で縄文時代中期の土器が採取されている。島田市側の遺跡は湯日川南北の台地上に存在し、北岸台地上では多くの遺跡が調査されている。これら遺跡は六角形住居を検出した東鎌塚原遺跡(2)を代表として中期の遺跡が主体を占めるが、中原遺跡(71)や青木原遺跡(75)のように草創期に遡る遺物が出土している遺跡も存在する。

弥生時代

弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ数は少ない。坂口谷川流域では宮下遺跡(56)、辻川遺跡(57)がこの時期の遺跡とされている。図示した範囲外であるが勝間田川下流の西川遺跡では中期中葉～後期の遺物が出土している。島田市側では湯日川北岸台地の宮上遺跡(14)で中期の土器が出土している。

古墳時代

古墳時代に位置づけられる遺跡の大半が後期に急増する群集墳である。星久保古墳群を含め坂口谷川流域でも台地上から斜面にかけて多くの後期古墳が造営される。湯日川流域では坂口谷川流域以上に多くの古墳群が見られる。水掛渡A～D群(35～37・73)は湯日川右岸台地上の代表的な古墳群と言えよう。湯日川左岸台地上には前方後円墳の愛宕塚を含む谷口原古墳群(17)や環頭柄頭を出土した高根森古墳群(19)など注目すべき古墳群が密集する。一方、勝間田川流域でも智生寺山古墳群(65)や権之助屋敷古墳群(63)など勝間田川两岸の台地斜面に古墳群が存在している。ところで、掛川市や菊川町など東遠江一帯は横穴が盛行する地域である。ただし、今回調査を行った星久保古墳群を含め、東遠江の中でも東端一帯は横穴ではなく横穴式石室によって後期古墳の埋葬施設は占められる。図示した範囲外であるが、勝田川北岸の大ヶ谷横穴は横穴分布の東限に当たるものである。なお、前期・中期の古墳として位置付けられているのは坂口谷川下流右岸の倉見原3号墳のみである。

古墳時代の集落は坂口谷川流域ではその存在が知られていなかった。今回の調査で集落跡を発見できたことは大きな成果と言える。勝田川流域では白駒遺跡と勝田井の口遺跡が前期に位置づけられる集落跡である。島田市側では湯日川北岸台地の宮上遺跡(14)、中原遺跡(71)、青木原遺跡(75)で古墳時代後期の集落が調査されている。沼伏遺跡(26)は古墳時代中期の祭祀関連の遺跡として知られている。

奈良・平安時代

律令期のこの地域は遠江国榛原郡に含まれる。『倭名類聚鈔』には榛原郡内に存在した9つの郷が記されており、神戸郷あるいは船木郷が坂口地区に比定されている¹。この時期の遺跡は坂口谷川流域では知られていないが、勝間田川流域と湯日川流域では調査が行われている。特に湯日川两岸台地上には多くの遺跡があり注目すべき遺跡も存在する。南岸台地上には古代寺院の竹林寺魔寺(46)が存在する。北岸台地上には円面鏡を出土した青木原遺跡(75)をはじめ多くの遺跡が存在し、この付近が「初倉驛家」推定地とされる。なお、平安時代末から鎌倉時代にかけては勝間田川流域や湯日川流域では窯業遺跡の存在も知られているが、坂口谷川流域には確認されていない。

中世以降

坂口谷川流域における中世の遺跡は宮下遺跡(56)以外知られていない。布目瓦などが表採されている王屋敷寺院(33)は古代～中世の可能性がある。勝間田川流域では勝田井の口遺跡等がこの時期の遺跡である。湯日川流域では青木原遺跡(75)などがこの時期の遺跡である。なお、おおよその区分ではあるが湯日川上流域は芦戸呂荘、湯日川下流と坂口谷川流域は初倉荘、勝田川流域は勝間田荘に比定されているが、莊園に関する断定できる遺跡は確認されていない。南北朝～室町時代になると勝間田氏が付近一帯に勢力を伸ばす。星久保古墳群の北西にある石雲院は1455年の創建で、勝間田氏と縁が深いことが伝えられている。

1471年には勝間田氏を撃ち破り今川氏がこの地域勢力を広げる。今川氏滅亡後は、武田氏と徳川氏が嗣を競い徳川氏の勢力下におかれ。徳川氏が江戸に移ると山内氏の勢力下におかれ、江戸時代になると坂口周辺は概ね掛川藩領であるが、旗本所領も混在する。水ヶ谷経塚(50)は近世のものとされている。近代以降、牧ノ原台地一帯の開墾が行われ茶畠が広がり現在の景観につながる。

1. 榛原町史編纂委員会1988では神戸郷を、島田市史編さん委員会1996では船木郷を坂口に比定している。

3. 基本層序

丘陵地の遺跡であり、調査範囲内で丘陵斜面部分と平坦部が存在する。平坦部と斜面部では若干様相が異なるため調査区ごとにその概略を記すことにする。

1区

1区では調査区の大半においてはI層の直下にIV層が広がっている。ただし、1区でも調査区南東部の標高が低い部分だけはI層とIV層の間にIII層が存在した。遺構はIV層に掘り込まれていた。1区の周辺は元来、より小高い地形であったが、畑地として開墾するためかなりの削平を行い、その廃土で谷部を埋めたことが地元の方の話から判明している。なお、I層からは遺物が出土したが、III層やIV層では出土しなかった。

2区

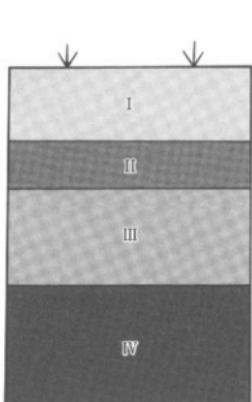
2区はI層の直下は遺構検出面であるIII層が広がっている。I層の厚さは50~70cm程である。ただし、所々、I層は深くまで及んでいる。III層は調査区の東に進むにつれ、礫の包含量が増加する。

3区

3区はI層を除去するとIII層が現れる。3区の北西部は畑地として利用されていなかったため、I層の厚さは30cm程度であった。南東半は茶畠として利用されていたため深くまで天地返しが行われており、I層は50~80cm程の厚さがある。調査区北西半ではIII層は礫が多く混ざるが、東に進むに従い礫は少なくなる。調査区の南東半ではIII層に含まれる礫は少ない。遺構が掘り込まれているのはIII層である。遺物はI層から出土し、III層からは出土しない。

4区

4区は調査区の東端部と調査区西部の谷部ではI層の下層はII層が見られ、II層を除去するとIII層が現れる。その他の範囲はI層の直下はIII層である。



基本層序

I. 表土

茶畠、果樹畠の耕作土である。礫を多く含む30~80cm程の層。遺物包含層

II. 黒褐色粘土 (10YR2/2)

粘性は低い。しまりはややある。遺物は出土しなかった。

III. 明黄褐色粘土層 (10YR6/6)

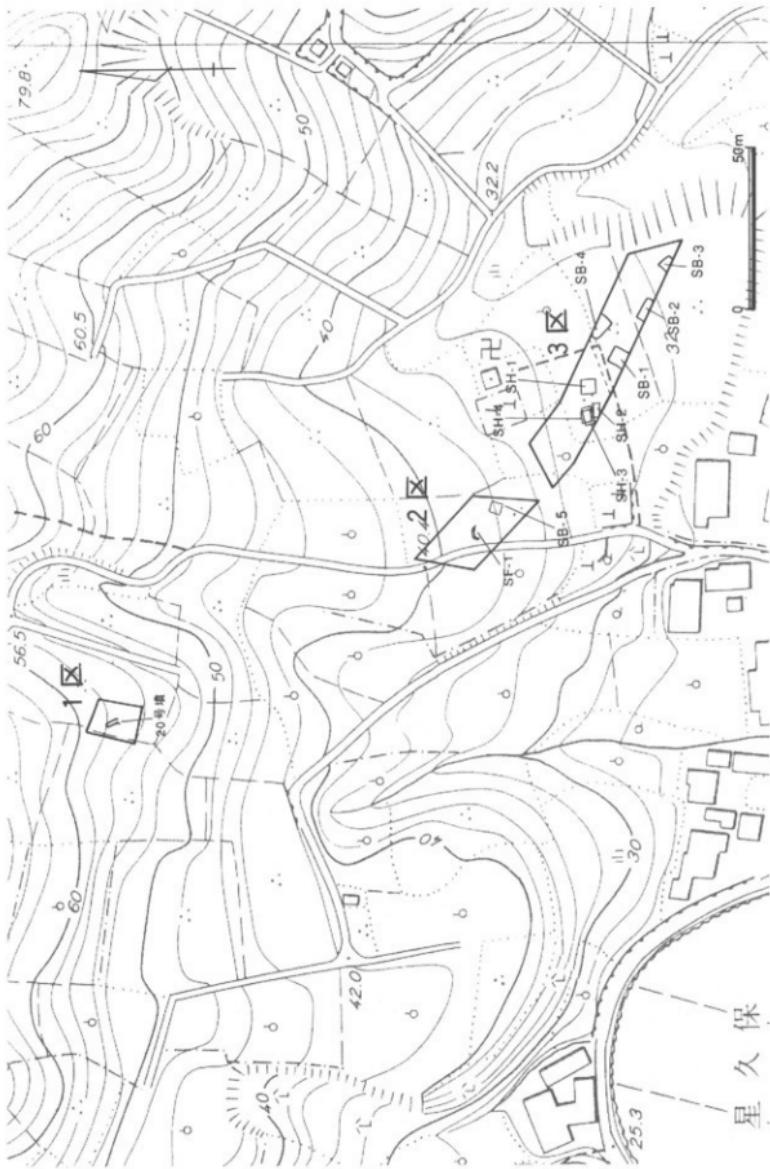
粘性、しまりともにある地山の層。2区・3区においては遺構検出面となる層。

IV. 明黄褐色粘土層 (10YR7/6)

地山。1区においてみられ、古墳はこの層に掘り込まれている。III層と土質や色調は近いが、III層の方がより大きな礫を多数含む。

図5 基本土層柱状図

図6 調査区全体図 (1/1,500)



第III章 調査の成果

第1節 遺構

1. 概要

星久保古墳群は東西約650m、南北約300mに渡る丘陵斜面一帯に19基の古墳が確認されていた。今回実施した調査では、調査区がこの遺跡範囲の東半を南東から北西に横断する形になっている。I章で述べたとおり、地形によって西から1区、2区、3区、4区と調査区を設定し調査を実施した。

確認調査で1区～3区において遺構・遺物の存在を確認し本調査へと移行した。遺構は1区ではIV層上面、その他の地区ではIII層上面で検出している。遺構検出面の標高は最も高所の1区北端部では60m、一番低い3区西端部では40mで、その比高差は約20mである。

1区では古墳時代後期の古墳1基を検出した。この古墳は無袖式の横穴式石室を主体部に持つ。2区では平安時代の竪穴住居跡1軒と中世の土坑1基を検出した。3区西側調査区では4棟の掘立柱建物跡を検出した。3棟が平安時代末～鎌倉時代、1棟が江戸時代のものと考えられる。3区東側調査区では4軒の竪穴住居跡を検出した。この竪穴住居跡は古墳時代後期に位置づけられ、全て方形で4本主柱穴をもつ建物に復原できた。この内、3基は竈の存在が確認できた。以下、時代別に詳細を記す。

2. 古墳時代の遺構

(1) 20号墳（図9・10）

1区で調査を実施した古墳は過去に行われた現地踏査では知られていない新発見の古墳であった。榛原町教育委員会と協議の結果、この古墳は星久保20号墳として登録された。

①外部施設

外部施設は確認できなかった。おそらく、石室を覆う程度の墳丘は有していたと考えられるが、後世の耕作により削平されたのであろう。周溝が存在した可能性もあるが、石室の奥壁側にトレチをいたところ、その痕跡も確認できなかった。このことから周溝は元来存在しなかったと考えられる。

②内部施設

残存状況

内部主体は南に開口する横穴式石室である。残存状況は上部が耕作等により削平されており、石室の側壁は基底石と2段目を残す程度で、奥壁は基底石を残すのみであった。奥壁と側壁共に元来はこれより数段高く積まれていたと考えられる。石室内部には崩落した側壁の石材が見られた。搅乱は石室開口部側では石室床面まで達していたが、奥壁側では床面までは及んでいなかった。

形状と規模

横穴式石室の平面形態は無袖式で、その主軸方向¹はN-30°-Wである。玄室の平面形は奥壁部分で幅を狭め、いわゆる奥押り形を呈す。床面には敷石が施されていた。

石室の規模は全長2.5m、奥壁幅0.3m、最大幅0.8m、開口部は推定で0.7mである。残存する高さは奥壁部で床面より0.3mを測る。検出時、奥壁より約2.0m付近に石材が集中し、これが閉塞石と考えられる。その範囲は0.5m程である。

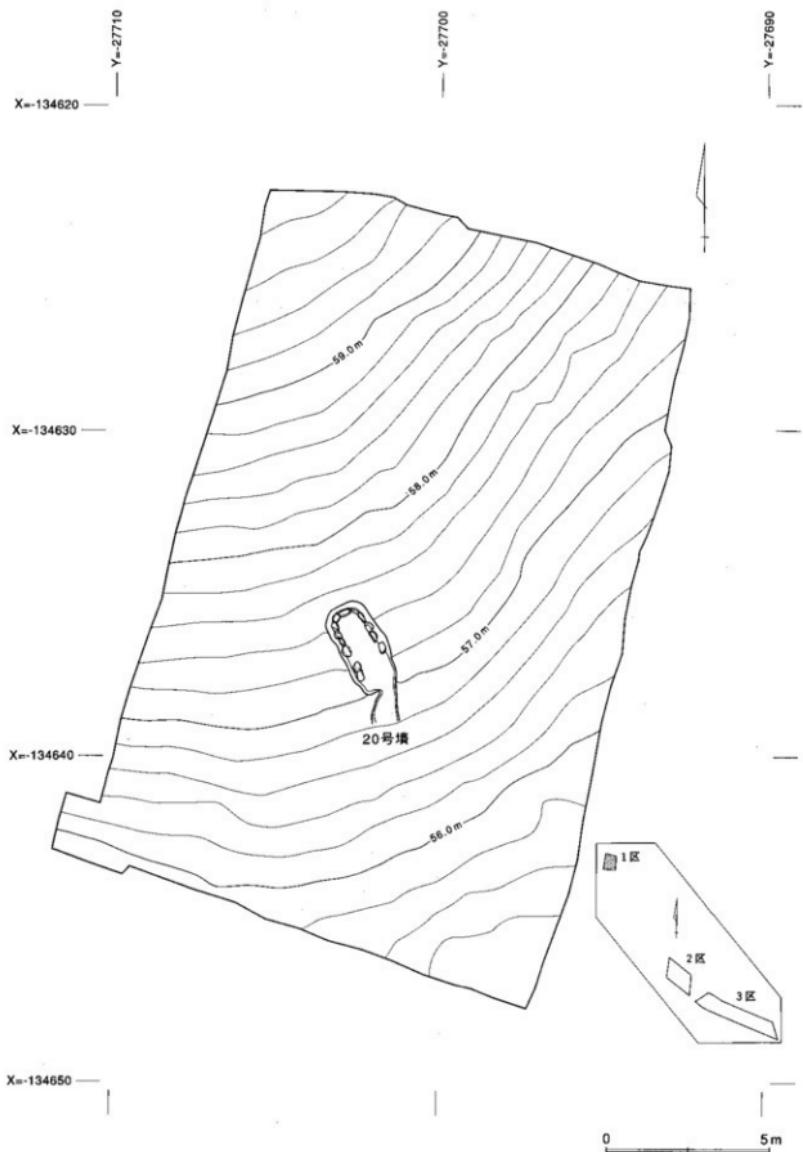


図7 1区全体図 (1/150)

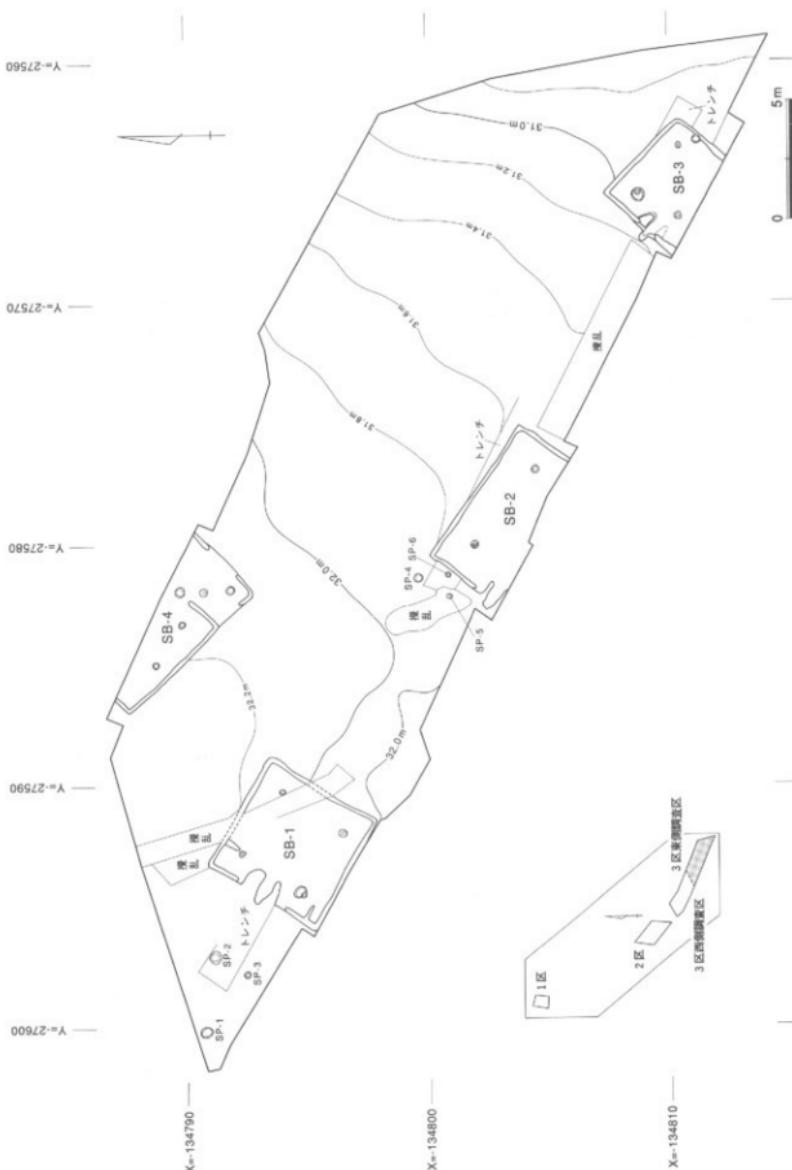


図 8 3 区東側調査区全体図 (1/200)

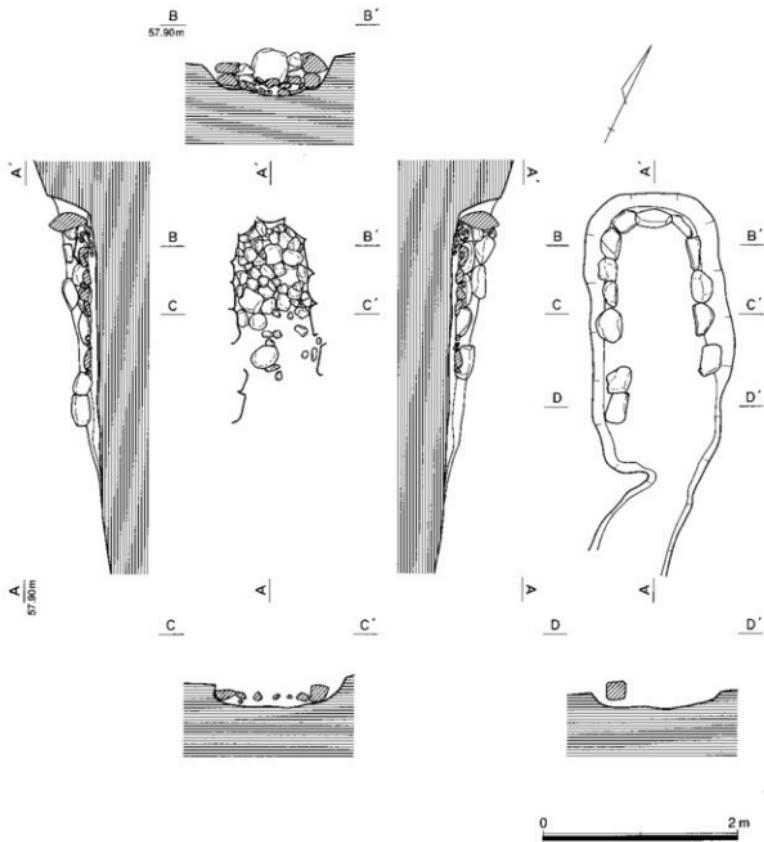


図9 20号墳展開図（1/50）

床面

床面は敷石が施され、一部は2重になっている。上面は奥壁部で標高57.35mを測り、奥壁から1.1m地点まで20~30cm程の円礫敷きである。下面は奥壁部で標高57.25mを計り、奥壁から1.1m地点まで5cm程の円礫が敷かれていた。なお、上面と下面の間は1~3cm程の粘土層が確認できた。追葬により上面が新設されたことも考えられるが、上面と下面の間からは出土遺物が存在しないことと、中間の粘土層では有機物の混入が観察できなかったことを考慮に入れると、当初から二面造られたと考えられる。床面は石室開口部まではほぼ水平であり、墓道から傾斜が始ま低下していく。

掘り方

掘り方は長さ2.9m、最大幅1.5mを測り、石室よりわずかに広い程度である。墓道の幅は0.7m、深さは約0.1mで、石室開口部を出てすぐに西側に向きを変える。

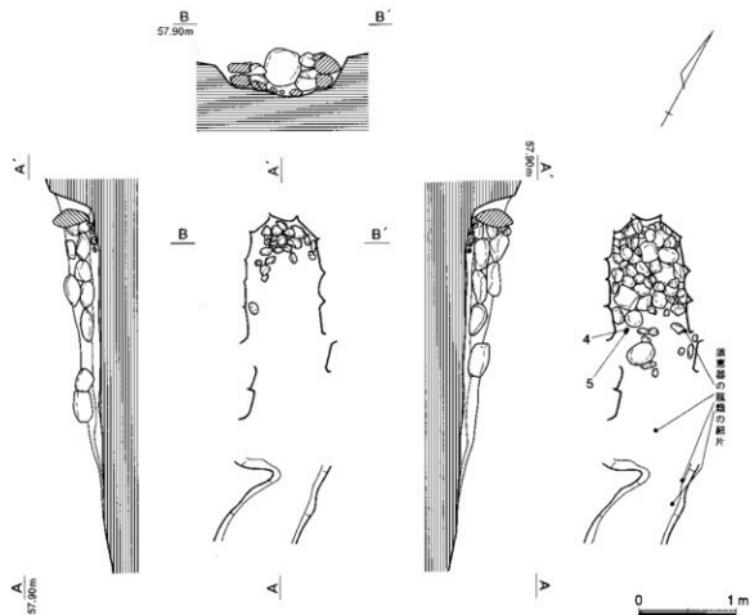


図10 20号墳展開図（下面）と遺物の出土状況（1/50）

石材

石室に使用される石材はいずれも円礫で、加工はせず自然石のまま使用している。これらの石材は付近の地山から採取したと推測される。側壁の基底石と2段目は共に広口面を石室内に向け横積みされる。奥壁は縦横約40cm、厚さ15cm程度の石材を鏡石状に据える。奥壁の石材は石室に使用される石材中最大のものであったが、この1石で奥壁を形成していたとは考えがたい。おそらく同様の石材を2～3段積んでいたのであろう。なお、奥壁の石材に対して石室の幅が広く、側壁の奥壁に接する部分の石材は両者に対して斜めになるように配置される。

③構築方法

残存状況が悪いため構築方法は一部を知り得たのみである。石室構築は地山を掘り込み、石室の基底石を据えたと考えられる。側壁を積み上げ、これが掘り込みより高くなると並行して墳丘を構築したのであろう。いわゆる「半地下水式の横穴式石室」と言われるものである。

④出土遺物（図28-1・2、29-4～6）

石室内から鉄鏃2点と須恵器瓶類の細片が出土し、墓道付近の表土から須恵器壺蓋と瓶類の破片が出土した。石室内の鉄鏃は元位置を留めると考えられるが、須恵器片は元位置を留めるものではなく、おそらく後世の擾乱により混入したものであろう。なお、石室内外から出土した須恵器瓶類の破片は同一個体のものであるが細片であるため図化はしなかった。表土から出土した須恵器壺蓋もこの古墳のものと考えられる。石室内の廃土を鏃^{さざなみ}にかけたところ水晶製の切子玉が1点出土した。出土した須恵器壺蓋はMT21型式並行期ⁱⁱと考えられ、8世紀前半の年代が与えられる。

(2) SB-1 (図11～13)

①位置と検出状況

SB-1は3区東側調査区の北西部に位置し、南東約11mにはSB-2が存在する。遺構の上部は削平され、さらに幅0.8m程度の搅乱が遺構の東側を南北に横切り、残存状況は良好とは言えない。ただし、ほぼ全貌が把握できた唯一の住居跡であるため、同地区で検出された他の住居跡の形状を把握する上で参考となり得た。なお、住居跡北端では炭化材が検出できた。

②規模と形状

一辺約5.3mを測る方形の竪穴住居跡で、主軸方向は $11^{\circ}N-50^{\circ}W$ である。住居跡内では壁溝と柱穴、竈が検出できた。検出した柱穴から4本の主柱をもつ住居に復原できる。床面は貼り床などの痕跡は存在しなかった。床面積は約24m²である。

住居跡の覆土には炭化物や焼土の粒子が混ざり、特に住居跡北西半では多く見られた。住居跡北隅に炭化材が存在したこと合わせて、焼失住居の可能性もある。ただし、東西と南では炭化材が検出できなかったことを考慮に入れると確証は得られず、ここではその可能性を指摘するに留める。

壁溝は15～25cm程度の幅で、竈部分を除いて全周する。断面はU字状を呈し、深さは住居跡床面から測り最深部で約15cmである。P-1とP-4付近では壁溝から住居跡内側に溝が延びている。所謂、間仕切りの溝であろうか。この溝は長さ約70cm、深さ5～10cm、幅は上場で約30cmを測る。

柱穴は4基検出でき、直径20～30cm、深さ20～30cmを測る。4基とも住居跡の対角線上に配置され、中穴間の距離は約3.0mである。P-1には直径約50cm、深さ約5cmの土坑が接する。P-1の掘り方であろう。なお、この他に住居跡内にはピットが2基存在したが、覆土は後世の耕作時のものであった。

竈は住居跡北西辺の中央部に存在した。この竈は住居跡床面直上に暗褐色の粘土を主体として馬蹄形状の袖部を構築している。北側の袖部には構築材の一部として土器師の甕が埋め込まれていた。北側の袖部は壁際で測り約80cmの幅を持ち、長さは110cmである。南側の袖部は幅70cm、長さ110cmである。燃焼部[※]は幅30cm、長さ100cm程の大きさでわずかに床面を掘り窪める。焚き口の幅は推定で約30cmを測る。煙道は壁を20cmほど掘り込み緩やかに立ち上がる。その幅は約30cmである。この竈は焼成を受けているが、それが強い状況ではない。

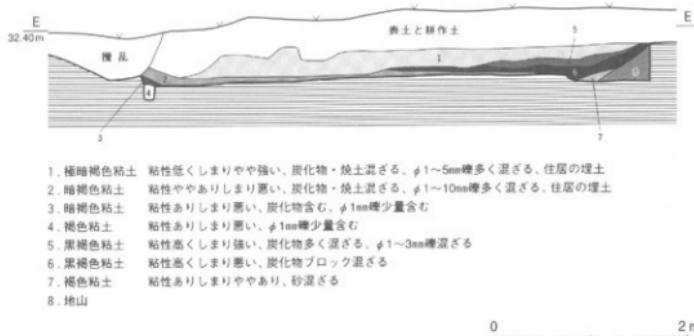
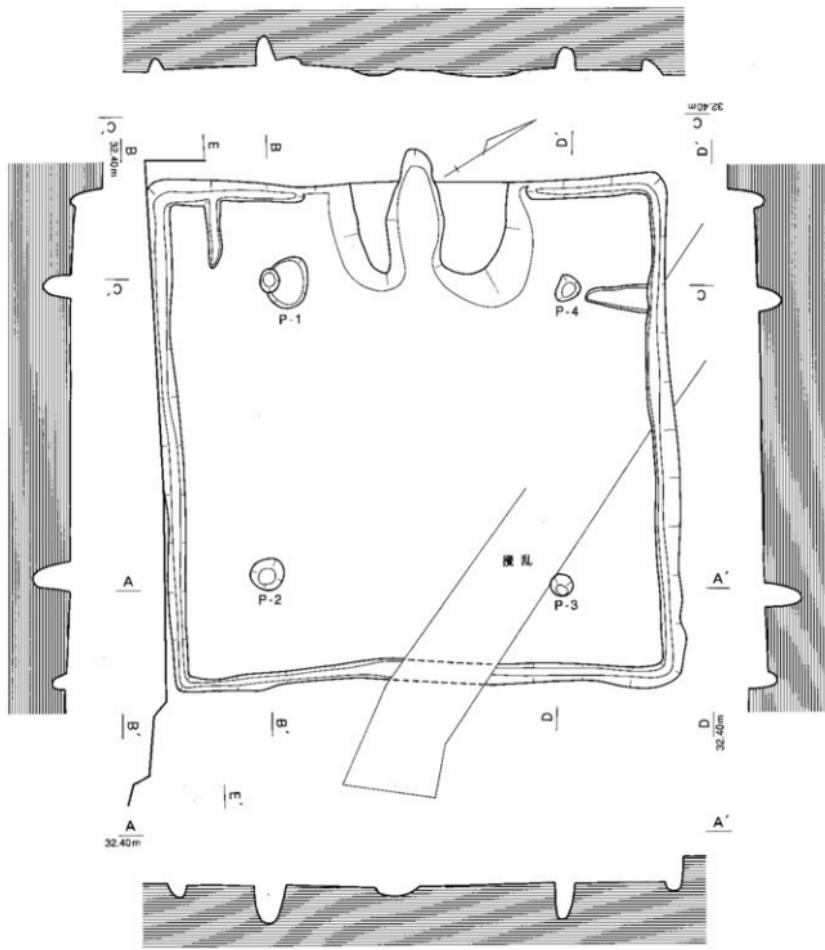


図11 SB-1 土層断面図 (1/50)



- P-1. 黒褐色粘土 粘性ありしまりやや悪い、炭化物と焼土の粒子を少量含む、 $\phi 5\text{mm}$ 大の礫混ざる
 P-2. 黒褐色粘土 粘性高くしまり悪い、炭化物多く含む、 $\phi 5\text{mm}$ 大の礫が極少量混ざる
 P-3. 橙褐色粘土 粘性高くしまり悪い、炭化物多く混ざる、焼土の粒子と $\phi 1\sim 30\text{mm}$ の礫が少量混ざる
 P-4. 黑褐色粘土 粘性高くしまりやや悪い、炭化物非常に多く混ざる、焼土の粒子と $\phi 1\sim 10\text{mm}$ の礫が含まれる

0 2 m

図12 SB-1実測図 (1/50)

③出土遺物 (図30-7~11)

竈とその付近から土師器が出土した。竈の北側の袖部から数点の土師器甕が出土し、竈の構築材として利用されたものと考えられる。この内、11は袖の内部に横位置に据えられれば完形の状態であった。竈以外の遺物としては住居跡北隅の炭化材が集中する地点において土師器の小型甕(8)が出土した。なお、竈の袖部から出土した遺物は6世紀後葉～7世紀前葉に位置づけられる。竈の構築材であるので住居跡の年代を物語るものと言えよう。

(3) SB-2 (図14~15)

①位置と検出状況

3区東側調査区の中央部南側に位置し、北西約11mにSB-1があり、南南東約10mにはSB-3が存在する。検出できたのは住居跡全体の2/3程度で、遺構は調査区外に広がることが確認できる。遺構は上部が削平され、遺構のほぼ中央を南北に茶畑耕作時の暗渠が横断していた。竪穴住居の内部施設としては壁溝と2本の柱穴、竈が検出できた。

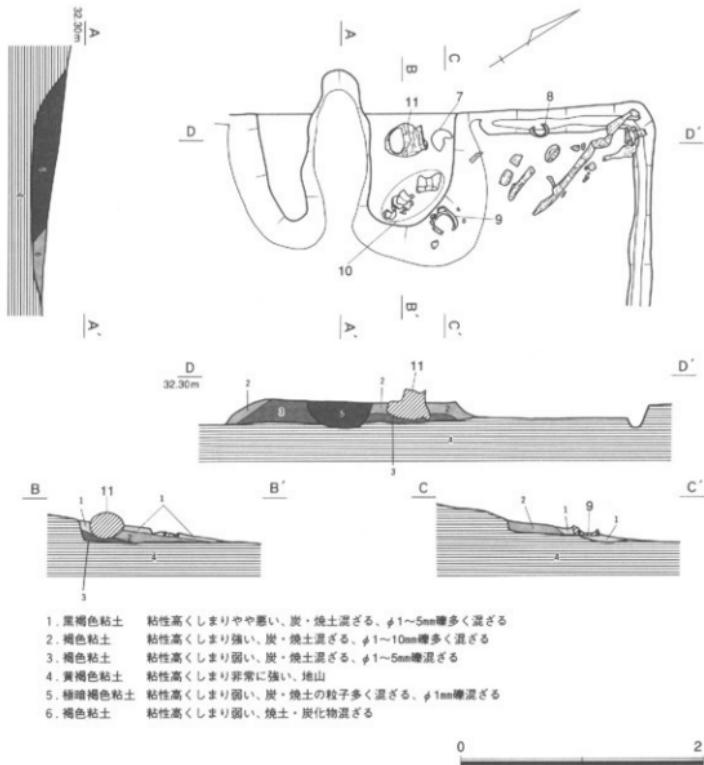
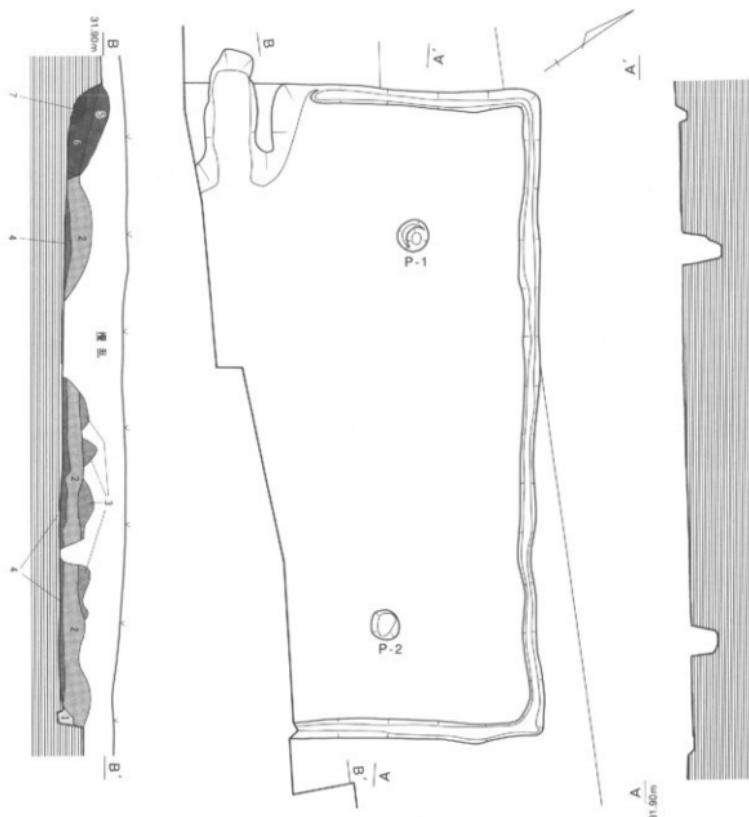


図13 SB-1 遺物出土状況図 (1/40)



- | | |
|-----------|--|
| 1. 暗褐色粘土 | 粘性ややありしまり悪い。炭化物・焼土混ざる |
| 2. 暗褐色粘土 | 粘性高くしまりややあり、炭・焼土多く混ざる、 $\phi 1\sim 30mm$ の礫混ざる |
| 3. 黒褐色粘土 | 粘性高くしまりやや悪い。炭化物・焼土多く混ざる、 $\phi 1mm$ 礫多く混ざる |
| 4. 褐色粘土 | 粘性高くしまりやや強い。炭多く混ざる。貼り床か |
| 5. 褐色粘土 | 粘性高くしまりやや悪い。炭化物・焼土混ざる、 $\phi 1\sim 10mm$ 礫多く混ざる。埋土 |
| 6. 褐色粘土 | 粘性やや高くしまりやや強い。 $\phi 1\sim 10mm$ 礫多く混ざる。覆いの袖 |
| 7. 暗赤褐色粘土 | 粘性ややありしまり強い。 $\phi 1\sim 5mm$ 礫多く混ざる。蓋の袖 |

P-1. 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや悪い、 $\phi 1\sim 3mm$ 大の礫と炭化物が多く混ざる
 P-2. 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや強い。地山の土がブロック状に入る。炭化物を含み $\phi 1\sim 10mm$ 大の礫も含まれる



図14 SB-2 実測図 (1/50)

②規模と形状

主軸をN-53°-Wにとる方形の竪穴住居跡である。確認できた柱穴は2基であるがその配置から4本主柱穴の住居に復原できる。主軸の長さは6.8mであり、SB-1よりやや規模が大きい。床面積40m²弱の竪穴住居と推測される。

壁溝は確認できた範囲では竈部分を除き全周する。幅は10~20cm程度で、U字状の断面形態である。その深さは住居跡床面から測り5~10cm程度である。

柱穴は2基検出できた。共に直径約30cm、深さ15~25cmを測る。柱穴間の距離は約4.0mである。

竈は住居跡の北西辺に存在した。おそらく住居跡の北西辺のほぼ中央に相当する位置である。袖部は北側が一部破壊をうけ、南側は調査区外へと続いているため、全容は不明である。北側の袖部は残存する高さが30cm、壁際で推定幅50cmを測り、長さは100cmである。袖部は床面直上に褐色粘土を主体として構築し、南側の袖部には構築材として石材が使用されている。燃焼部は幅40cm、長さ50cm程度の大きさで、わずかに床面を掘り窪めている。焼き口は推定で30cmの幅を持つ。煙道は50cmの幅で壁を40cmほど切り込み造られている。煙道は住居跡外になだらかに上昇するが、平坦面を途中に持つ。竈のほぼ中央には火を強く受けた長方形の石材が存在した。この石材は砂岩質で石製支脚と考えられる。

③出土遺物（図31-12・13）

竈付近から土師器が出土した。竈燃焼部からは甕の底部（13）が出土した。高坏（12）は竈の南東側の袖部付近の住居跡覆土中から出土した。この他、竈燃焼部から土師器の細片が出土したが、復原はできなかった。出土遺物から、この住居跡はSB-1と同時期の6世紀後葉～7世紀前葉と考えられる。

④ SB-3（図16～17）

①位置と検出状況

3区東側調査区の南東端に位置し、北北西約10mにはSB-4が存在する。検出できたのは全体の約3/4

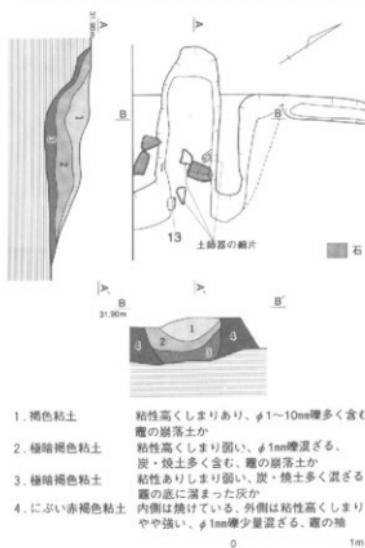


図15 SB-2 遺物出土状況図（1/40）

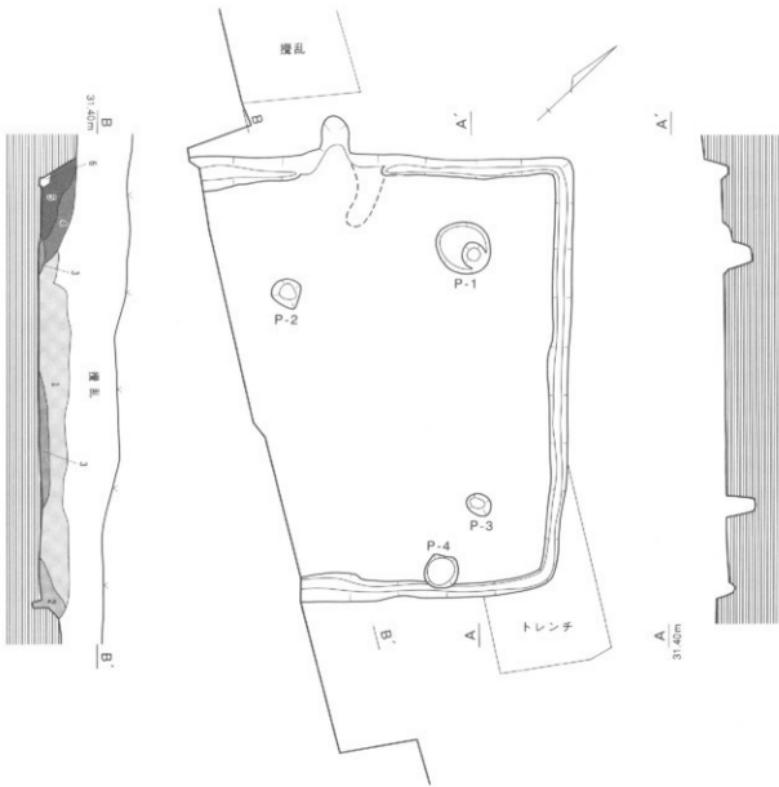
で、遺構は調査区外に広がることが確認できた。他の住居跡と同様に遺構の上部は耕作に伴って削平されていた。屋内施設としては壁溝と柱穴、竈が検出できた。ただし、竈は袖部の一部が残存する程度である。

②形状と規模

住居は主軸をN-50°-Wにとる。住居跡内には2基の柱穴が存在し、その配置から4本主柱の住居跡に復原できる。主軸の長さは4.6mであり、一辺4.5m前後の方形の竪穴住居に復原できる。

壁溝は竈推定部分を除いて全周する。断面は台形状で、その幅は約10~20cm、深さは住居跡床面から測り約10cmである。

P-1とP-3がこの住居跡の柱穴と考えられる。共に直径約30cm、深さ約30cmである。P-1に重なって直径約50cm、深さ約5cmの掘り込みが確認できた。P-2とP-4は検出状況や覆土から住居跡と同時期のものであることは言えるが、その性格は不明である。



1. 黒褐色粘土 粘性高くしまりやや悪い、 $\phi 1\sim10mm$ 礫多く混ざる、炭・焼土多く混ざる
2. 棕色粘土 粘性高くしまり悪い、炭・焼土多く混ざる、 $\phi 1\sim3mm$ 礫少量混ざる
3. 棕色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭化物・焼土混ざる、シルト・砂含む
4. 黑褐色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭・焼土 $\phi 1mm$ 礫混ざる
5. 棕色粘土 粘性高くしまりやや強い、 $\phi 1\sim3mm$ 礫多く混ざる
6. 墓褐色粘土 粘性高くしまりやや悪い

- P-1. 暗褐色粘土 粘性高くしまり悪い、炭化物と焼土が多く混ざる、 $\phi 1\sim10mm$ 大の礫が多く含まれる
 P-2. 黑褐色粘土 粘性ありしまり悪い、極少量の炭化物と焼土が混ざる、山地の土がブロック状に入り $\phi 1\sim5mm$ 大の礫が多い
 P-3. 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭化物と焼土が混ざる、 $\phi 1\sim10mm$ 大の礫多い
 P-4. 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭化物と焼土が少量混ざる

0 2 m

図16 SB-3 実測図 (1/50)

竈は住居跡の北西辺に存在し、おそらく北西辺の中央部に位置していると考えられる。竈の煙道部は30cmの幅でU字状に40cm程度住居跡北西壁を切り込み造られている。袖部は北側の極一部が検出できた程度で、住居跡床面上に褐色粘土を用いて構築されている。その規模は壁際で幅30cm、長さ70cm、残存高5cmである。弱いながらも焼成を受けている範囲があり、燃焼部は幅30cm、長さ60cm程度と推定される。なお、煙道を中心として住居跡内を見た場合、幅約150cm、長さ約100cmの範囲で焼土と炭化物の粒子が広がっていることが確認できた。

③出土遺物（図32-14～16）

遺物は竈推定部分から土師器の破片が出土した。いずれも壊である。この住居跡もSB-1とほぼ同時期と考えられ6世紀後葉～7世紀前葉であろう。

（5）SB-4（図18）

①位置と残存状況

3区東側調査区の北側中央部に位置し、SB-1の北東約6mに存在する。住居跡の約1/3程度が検出でき、遺構は調査区外に続いている。遺構の上部は開墾により大半が削平されており、今回調査した古墳時代の住居跡の中では残存状況が最も悪かった。住居跡内では壁溝と柱穴を検出した。

②形状と規模

全容の把握には至らないが、主軸をN-44°Wに持つ住居跡と考えられる。屋内施設としては壁溝と柱穴が検出できた。ただし、柱穴は主柱になると考えられるものは1基のみである。竪穴住居跡1～3の例から、4本主柱の住居と推察される。なお、竈の痕跡は発見できなかった。調査区外に存在するのであろう。なお、検出できた主軸の長さは7.5mである。

壁溝は一部で途切れるが、住居跡内をほぼ周囲する。壁溝の断面形状はU字形を呈し、幅は10～20cm、深さは住居跡床面から測り5cm程度である。住居跡西角から測り約5.0mの地点で壁溝は住居跡内に折れ曲がる。これは間仕切り、あるいは住居の建て替えか拡張に伴う構造の可能性が指摘できる。

柱穴は5基検出できた直径30cm、深さ25cmのP-4を除き、その他は直径30～40cm、深さ5～10cmの極浅いものである。浅い遺構は柱穴では無い可能性も高い。

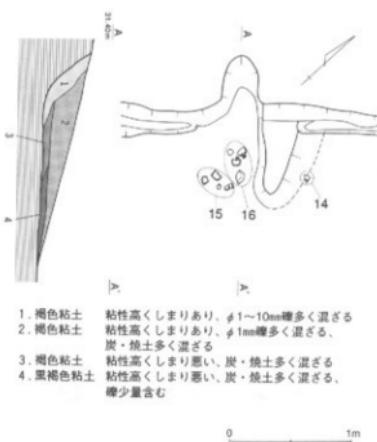


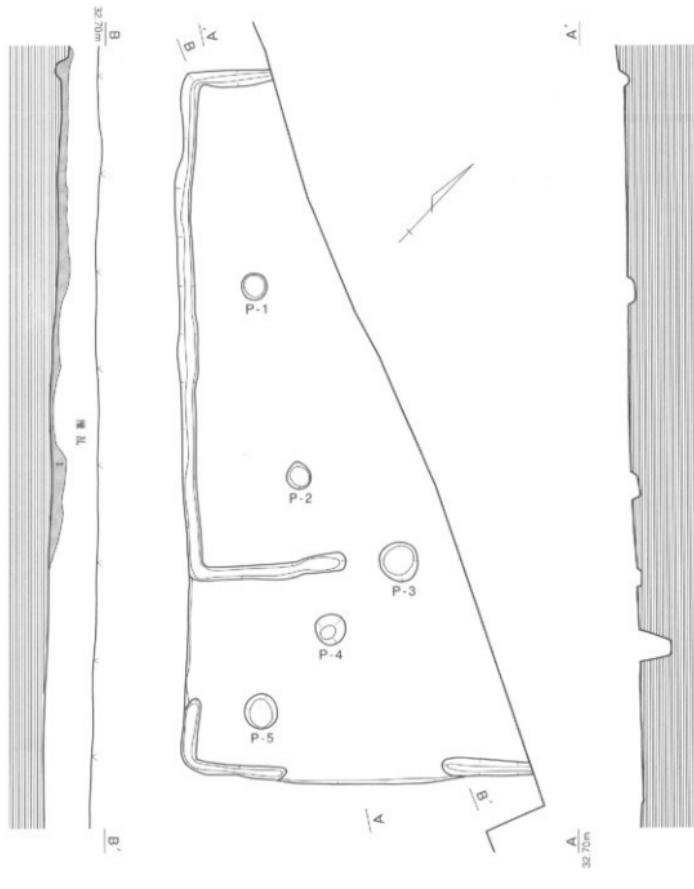
図17 SB-3 遺物出土状況図（1/40）

③出土遺物

搅乱土中から出土した山茶碗の細片以外に、出土遺物は無かった。遺物から時期は判断できないが、6世紀後半～7世紀前葉の住居跡と推測される。

（6）その他の遺構

古墳時代の遺構を検出した3区東側調査区では上記の遺構以外にピットが6基存在した。調査区北東端にSP-1～3、竪穴住居跡2の北西にSP-4～6が存在する。6基とも覆土はしまりのやや強い褐色粘土で、炭化物や焼土の粒子と1～10mm大の礫が微量含まっていた。古墳時代の竪穴住居跡と覆土が異なるため、別時期の遺構の可能性がある。しかし、いずれのピットからも時期を決定する手がかりは得られなかった。SP-1・2は直径約50cmで深さ20cm、SP-3は直径30cmで深さ10cm、SP-4は直径40cmで深さ10cm、SP-5・6は直径20cmで深さ10cmであった。



1. 暗褐色粘土 粘性高くしまりややあり、炭化物・焼土混ざる、 $\phi 1\sim 30mm$ 礫多く含む

P-1 黒褐色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭化物が含まれる、 $\phi 1mm$ 大の礫が多く混ざる

P-2 棕色粘土 粘性高くしまりやや悪い、少量の炭化物と $\phi 1\sim 30mm$ 大の礫を含む

P-3 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや悪い、 $\phi 5mm$ 大の炭化物が非常に多く混ざる、焼土と $\phi 1mm$ 大の礫が極少量混ざる

P-4 棕色粘土 粘性高くしまりやや強い、炭化物と $\phi 1\sim 50mm$ 大の礫が少量含まれる

P-5 暗褐色粘土 粘性高くしまりやや強い、焼土と炭化物が多く含まれる、 $\phi 1\sim 5mm$ 大の礫が多く混ざる



図18 SB-4 実測図 (1/50)

3. 平安時代～江戸時代の遺構

この時期の遺構は2区と3区西側調査区で検出した。2区では竪穴住居跡1軒(SB-5)と1基の土坑(SF-1)を検出した。出土した遺物からSB-5は10世紀前半に、SF-1は14世紀に位置づけられる。3区西側調査区では多数の柱穴を検出した。この中から、4棟の掘立柱建物跡が復原できた。ただし、柱穴の並びが整然としないものが多く、恒常的な建築物ではなく簡素な建物であった可能性が考えられる。時期はSH-1・SH-3・SH-4が12世紀中葉～後葉、SH-2が18世紀代と考えられる。なお、柱穴群の中には建物に復原できないものの数本単位で並ぶものがあり、他にも掘立柱建物が存在した可能性は高い。しかし、残存状況が悪いこともあり、調査では上記の4棟以外に建物は抽出できなかった。

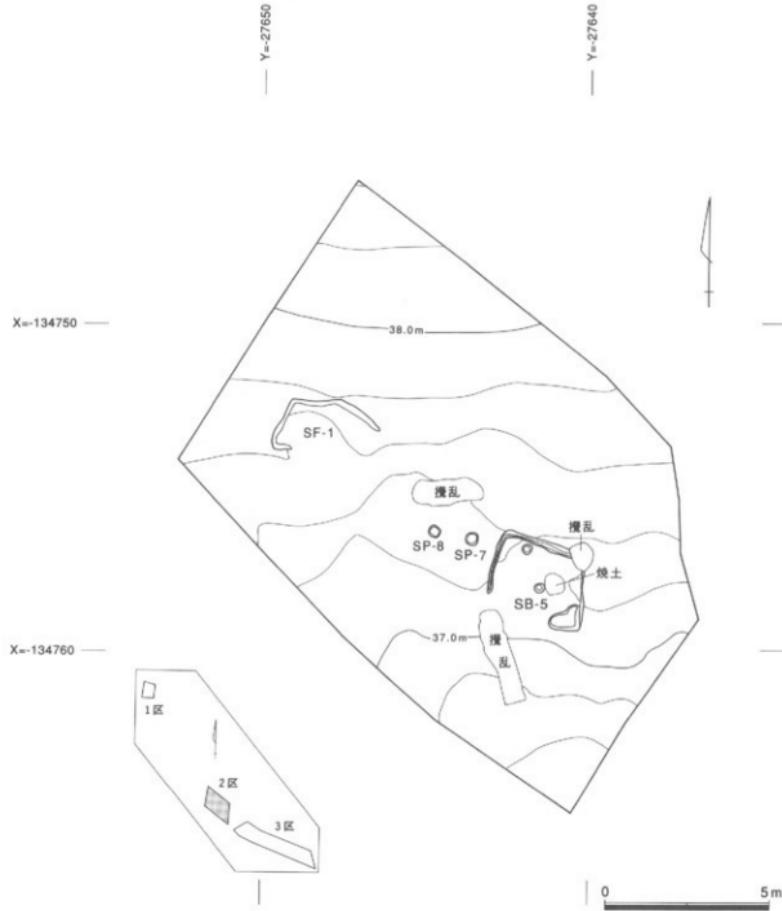


図19 2区全体図（1/150）

(I) SB-5 (図20・21)

①位置と残存状況

SB-5は2区の東側で検出した。2区は調査区の南東に向かって緩やかに傾斜する地形であったため、遺構は北側に比べ南側、西側に比べ東側は搅乱が深くまで達していた。また、遺構の北東隅には一段深い搅乱が入っていた。残存状況は悪いが、遺構全体の形状は窺い知ることができた。この竪穴住居跡内には壁溝が巡り、2基のピットと1基の土坑が存在した。また、床面中央部のやや東寄りでは強く焼けた箇所を検出した。遺構の覆土は黒褐色粘土で炭化物を多く含んでいた。遺構内のピットと土坑もほぼ同様の覆土である。

②形状と規模

この遺構は南北長約2.5m、東西の長さは北側で約2.5m、南側で約3.0mを測り、南側が開く台形状を呈する。残存する壁高は、最も残りの良かった遺構の北側で約25cmを測る。住居跡床面の標高は37.15mである。遺構の南北軸はN-9°-Eである。

壁溝は遺構の北辺と西辺は残存したが、その他の壁面には存在しなかった。壁溝の幅は10~20cm程度で、断面はU字状である。深さは遺構床面から測り約5cmである。

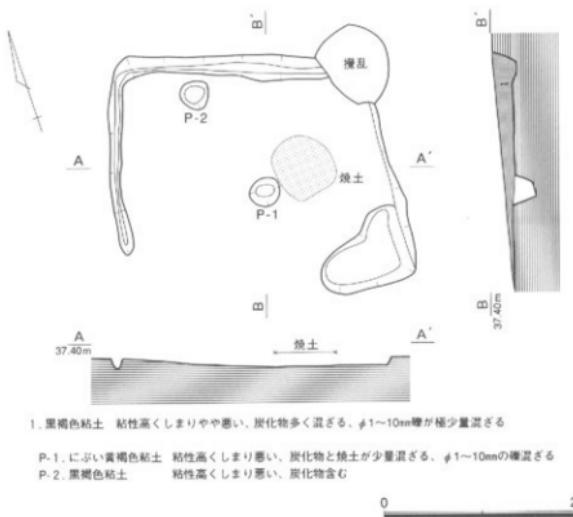


図20 SB-5 実測図 (1/50)

この遺構には2基のピットと1基の土坑が伴っていた。P-1は直径30cm、深さ約20cmで住居跡中央部に存在する。P-2は遺構の北西部に位置し直径約30cm、深さ約10cmである。ただし、これらの物が住居の柱穴となるかは不明である。土坑は住居跡の南東部にあり東西90cm、南北80cm、深さ約10cmの不整形な土坑である。

この他に竪穴住居跡内ではP-1の東横に直径約70cmの範囲で床面が強く焼けた痕跡が存在した。焼成は約5cmの厚さに及ぶ。

③出土遺物（図32・33）

今回、調査した遺構の中では最も多くの遺物を出土した。床面直上で出土した遺物は17~24の灰釉陶器と25~30の土師器である。遺物は床面のほぼ全面から出土した。なお、灰釉陶器の中には墨書き土器が1点含まれている(17)。この他にも住居跡の覆土からは31~56の灰釉陶器や57・58土師器が出土した。

出土した灰釉陶器はいずれも東遠江地方で生産されたものである。時期は折戸53号窯式⁴に並行する時期に位置づけられ、10世紀前半と考えられる。

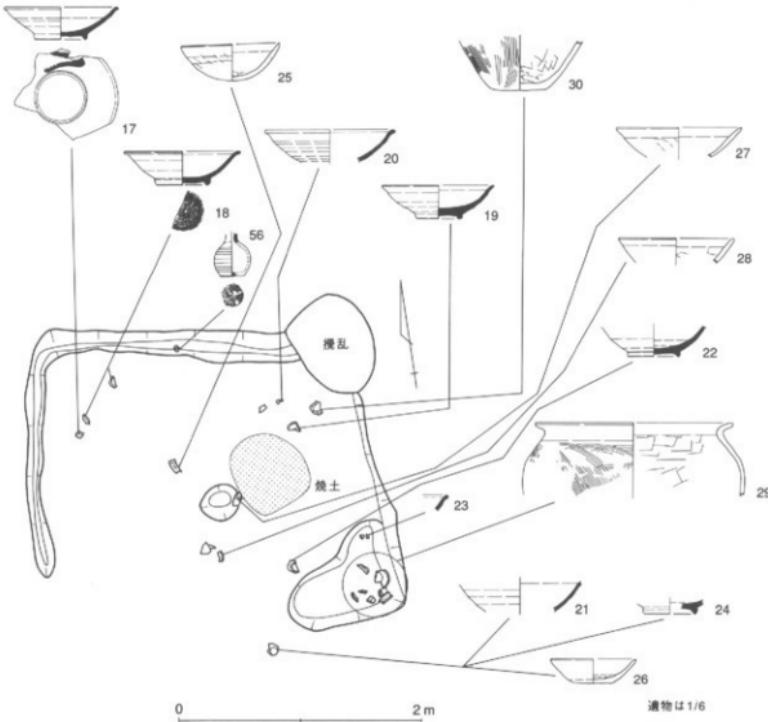


図21 SB-5 遺物出土状況図（1/40）

(2) SF-1 (図22)

①位置と検出状況

2区の西側にあり、SB-5から北西に約5mの距離である。遺構の上部と南側は削平され、遺構の内部においても所々攪乱が深くまで達していた。そのため、残存状況は遺構の輪郭がつかめる程度であった。遺構の覆土は粘性が高い黒褐色粘土で炭化物が極少量含まれていた。

②形状と規模

不正形な台形の遺構である。東西が3.4m、南北が1.5m程度の規模である。深さは遺構の北側で遺構検出面より15cmを測る。底面の標高は37.6mである。この遺構は内部施設を伴わなかった。

③出土遺物 (図34-59・60)

14世紀代に位置づけられるカワラケ(59)がほぼ完形で出土したほか、山茶挽口縁部の破片(60)が出土した。共に覆土からの出土で元位置を留めるものではないため、遺構の時期を明確に示すものではないが、14世紀以降^{vii}の年代が与えられる遺構である。

(3) その他の遺構

平安時代の遺構を検出した2区ではこの他に、2基のピットを検出した。2基ともSB-5の西側に位置する遺構である。

SP-7、SP-8共に直径40cm、深さ15cmである。覆土はしまりが非常に悪い黒褐色粘土であった。時期を知る手がかりは無く、両者とも時期は不明といわざるを得ない。

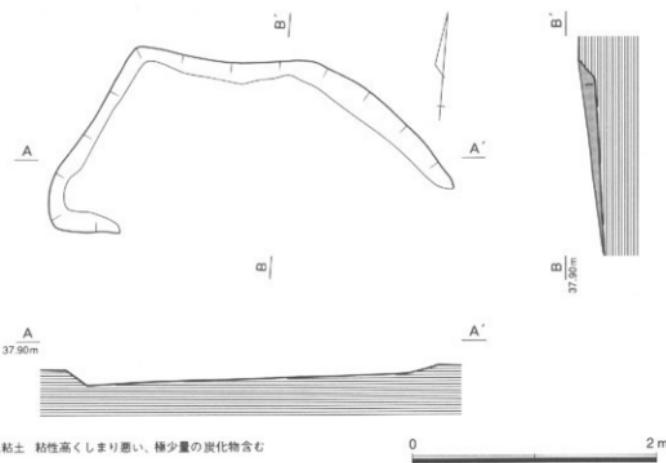


図22 SF-1 実測図 (1/40)

(4) SH- I (図23)

SH- 1は3区西側調査区の東側ほぼ中央に存在する。南北方向2間、東西方向2間の総柱の掘立柱建物跡である。南北5.1m、東西4.5mの規模で、南北の柱間距離は2.2~2.5m、東西は2.0~2.3mである。柱穴はそれぞれ直径30~60cm、深さは20cm前後である。長軸方向の方位はN-3° -Wである。

建物跡の中央に位置する柱穴のSP-133からは山茶椀小皿の破片が出土した。遺物は細片で図化しうるものではなかったが、平安時代末～鎌倉時代初頭に位置づけられる遺物である。SH- 1はこの時期の遺構と考えられる。

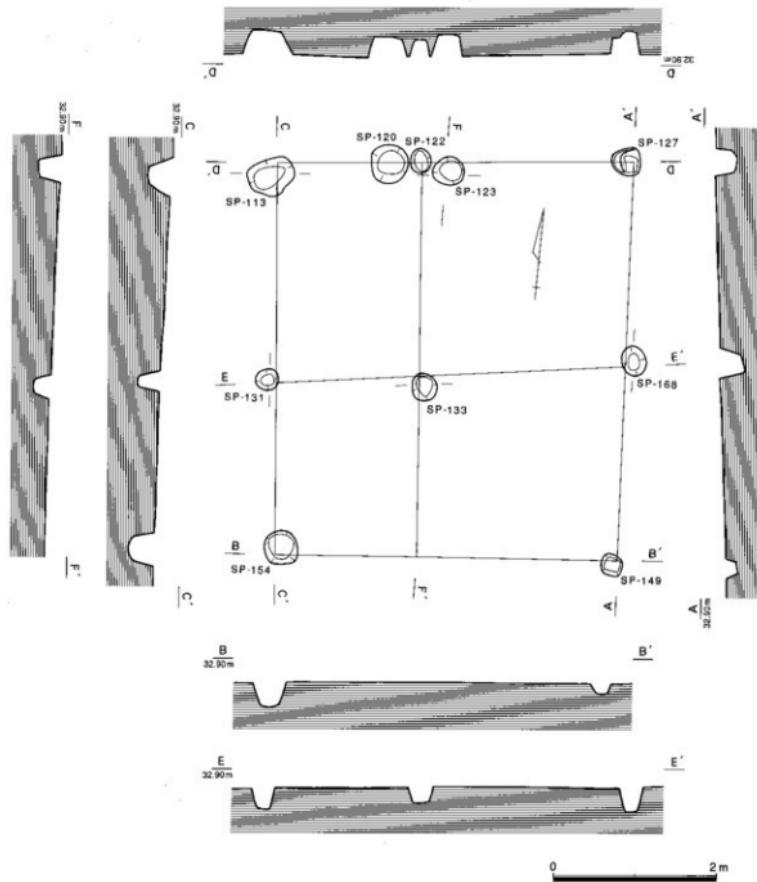


図23 SH- 1 実測図 (1 / 60)

图24 3区西侧调查区全图 (1/200)



(5) SH-2 (図25)

SH-2は3区西側調査区の中央南寄りで検出した。東西方向2間、南北方向1間の掘立柱建物跡である。規模は東西2.9m、南北1.9mである。南北の柱間距離は1.6m、東西の柱間距離は1.1~1.3mである。柱穴はそれぞれ直径20cm~30cmで、深さは20~40cmである。建物の南北軸をN-4°~Wにとる。

SP-59・60からは遺物が出土した。SP-59からは布目瓦の破片(図35-64)が出土した。SP-60からは擂鉢の破片(図35-61)と山茶椀の口縁部の破片(図35-67)が出土した。布目瓦片と山茶椀片は平安時代末~鎌倉時代に位置づけられ、擂鉢片は江戸時代に位置づけられる。布目瓦片と山茶椀片は混入した遺物と考えられ、この掘立柱建物跡は江戸時代、18世紀に属する遺構と捉えられる。

(6) SH-3 (図26)

SH-3は調査区のほぼ中央に、SH-4と重複して存在する。南北方向2間、東西方向4間の掘立柱建物跡で、東西約5.5m、南北約3.4mの規模である。中央の柱列と北側の柱列との柱穴間距離は1.9m前後、中央の柱列と南側の柱列の柱穴間距離は1.3~1.5mである。南北の柱穴間距離は前者の間隔の方が広い傾向にある。東西の柱穴間距離は1.3~1.6mである。柱穴はそれぞれ直径20~60cm、深さは15~55cmである。短軸方向の方位はN-16°~Wである。

柱穴の中にはSP-24~26・80~82、SP-29と30、SP-86と32、SP-35・36・38・39、SP-83やSP-54のように重複するものや隣接するものが見られ、建物の部分的な改築が行われたことが考えられる。また、

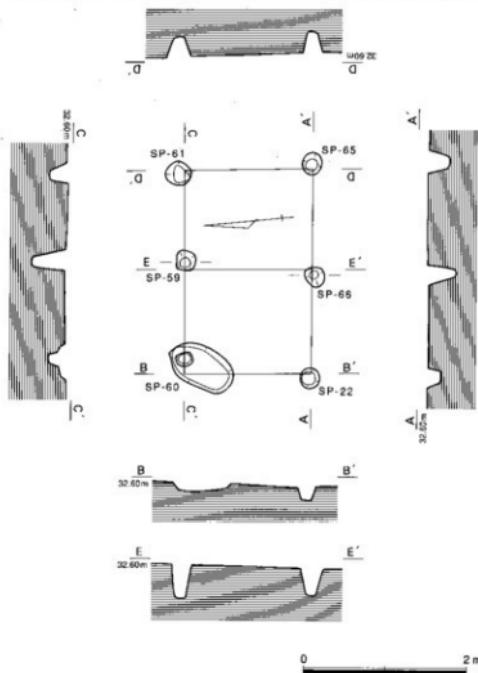


図25 SH-2 実測図 (1/60)

SP-24~26・80~82やSP-35・36・38・39のようにSH-4の柱穴と重複や隣接する柱穴が存在することからSH-3とSH-4は同位置における建て替えと考えられる。さらに多くの建て替えがされた可能性もあり得るが、調査では2棟以外には確証は得られずここではその可能性を指摘するに留める。また、SH-3とSH-4の新旧関係も把握できなかった。遺物はSP-25と80、36から山茶椀の破片が出土した(図35)。出土した遺物からSH-3とSH-4は平安時代末~鎌倉時代前半に位置づけられる。

(7) SH-4 (図27)

SH-4は調査区の南側ほぼ中央に、SH-3と重複して存在する。南北方向1間、東西方向4間の建物で、規模は東西5.0m、南北3.0mの長さである。南北の柱間距離は2.5~3.0m、東西の柱穴間距離は0.9~1.5mである。柱穴はそれぞれ直径30~80cm、深さは35~55cmである。建物の短軸はN-18°~Wに方位をとる。

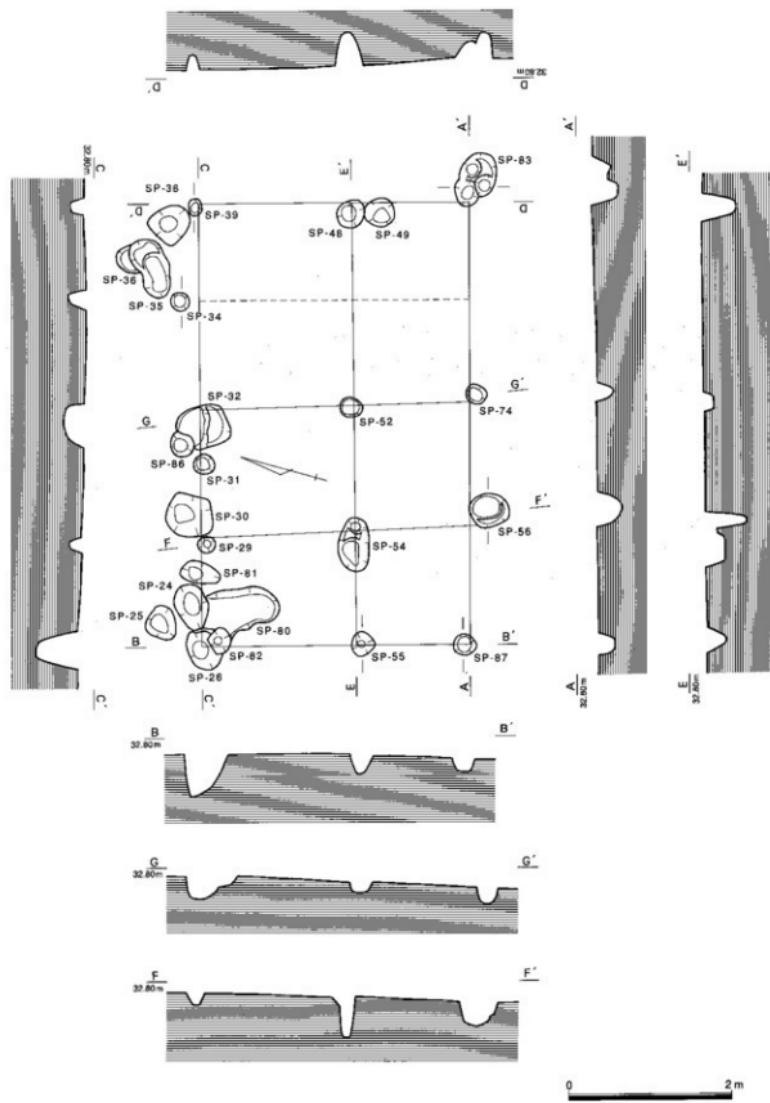


図26 SH-3 実測図 (1 / 60)

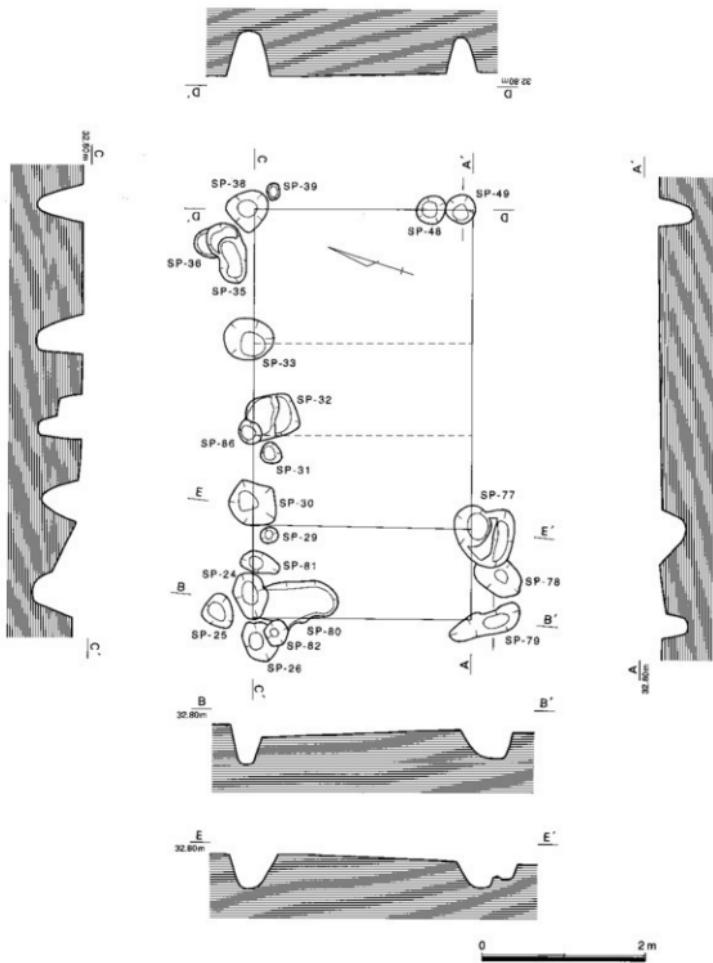


図27 SH-4 実測図 (1/60)

(8) その他の遺構

3区西侧調査区の中には上述の掘立柱建物跡4基の柱穴以外に多くのピットが存在する。これらは直径20cm~60cm、深さ15~80cmを測る遺構である。この中で、SP-90からは灰釉陶器の破片、SP-37、SP-41とSP-91、SP-118からは山茶椀、SP-106からは近世の陶磁器が出土した(図35)。

第2節 出土遺物

1. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は1区の20号墳とその周辺、3区東側調査区の堅穴住居跡から出土した。また、2区でも1点の遺物を表探した。

(1) 20号墳と1区・2区の遺構外出土遺物(図28-1~3、図29-4~6)

石室の中からは水晶製切子玉1点と鉄鏃2点、須恵器片が出土した。石室墓道周辺からは須恵器の坏蓋1点と瓶類の底部1点、甕の体部1点が出土した。石室内から出土した須恵器片は細片であり図示しなかったが、石室周辺から出土した瓶類と同一個体のものである。

1は墓道付近の表土から出土した須恵器坏蓋である。全体の約1/4が残存し、口径14.8cm、最大径15.4cm、器高3.7cmを測る。頂部には直径3.7cmの宝珠状つまみが付く。調整は外面が回転ヘラ削りとヨコナデ、内面がヨコナデである。焼成は良好で灰白色を呈す。この須恵器はMT21型式並行期のもので8世紀前半に位置づけられる。

2は墓道付近の表土から出土した須恵器瓶類の底部の破片である。外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデによる調整が行われている。焼成は良好で灰白色を呈する。なお、石室内から出土した須恵器片4点(図10の須恵器片)は、この土器と同一個体の体部に相当すると考えられる。これらの瓶類の細片には自然釉が付着する。

3は2区で表探した受部を持つ須恵器坏身の細片である。焼成はやや悪く、灰色を呈する。時期はTK217~46型式並行期と考えられる。

4は石室内部のほぼ中央から出土した鉄鏃である。頭部と茎の一部が残存したのみで、鏃身の形態は不明である。茎闊は棘状闊である。この他、石室内から4とは別個体の鉄鏃の茎の破片が1点出土したが、細片であるため図示しなかった。

5は石室内から出土した鉄製の両頭金具である。残存長は2.3cm、頭部は円形である。花弁は付かず、筒金の径は0.3cmである。

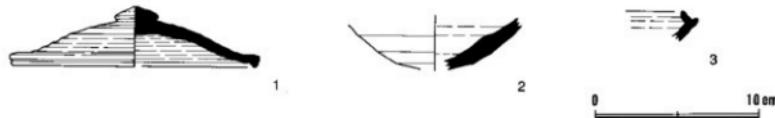


図28 1区・2区出土の須恵器

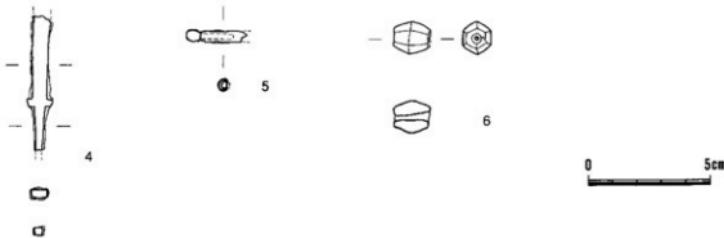


図29 20号墳石室内出土遺物

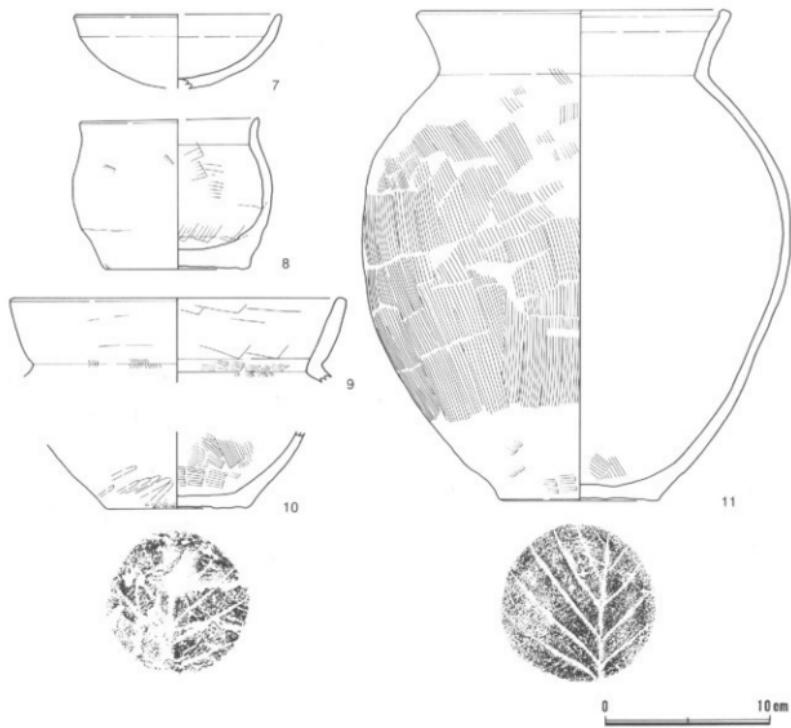


図30 SB-1 出土遺物

6は石室内の埋土を篩いにかけたところ、発見できた水晶製の切子玉である。全長1.5cm、幅は端部で0.75cm、中央で1.3cmである。断面形状は六角形であるが、稜はやや不明瞭である。穿孔は方側から行われ、孔径0.15~0.35cmである。

(2) SB-1 の出土遺物（図30-7~11）

SB-1からは竈周辺から5点の土師器が出土した。この内4点は竈の袖内部からの出土である。竈の袖部から出土した土師器は甕が3点、壺が1点である。竈以外では住居跡北西壁際の床面直上より土師器の小型甕が1点出土している。9と10は同一個体と考えられ、竈袖内部には合計2個体の土師器甕が存在したと言える。これら土師器の甕はいずれも、いわゆる「駿東型の甕¹²」と呼ばれるもので、その時期は6世紀後葉～7世紀前葉に位置づけられる。

7の土師器は竈の北側袖部を解体したところ、住居跡床面直上より出土した須恵器模倣坏である。底部から口縁部にかけて約1/2が残存し、口径は12.5cm、器高4.5cmの土器である。底部は丸底となり、体部は内湾気味に立ち上がる。体部上面でわずかに屈曲し、口縁部はごくわずかに外反する。摩耗が激しいため詳細はつかめないが、調整は内外面共にナデが施される。焼成は良好で淡灰色を呈し、胎土には細かな白色粒子と径2mm程度の躰が混ざる。胎土、色調共に9~11とは異なる土器である。

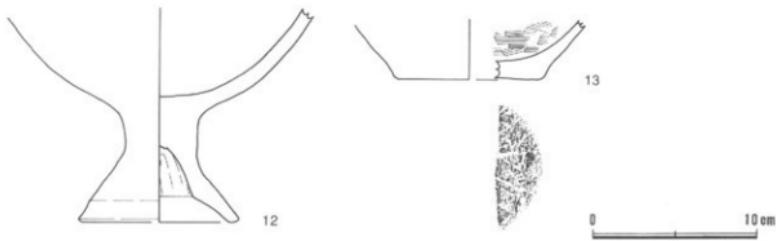


図31 SB-2出土遺物

8は住居跡北西の床面直上で出土した土師器の小型甕である。全体の1/2程度が残存する程度であった。頸部から口縁部にかけてはわずかに外反するもののほぼ直立的である。口径は10.7cm、最大径は胴部中央にあり12.1cmである。底径は8.5cm、器高は9.2cmである。調整は口縁部ではヨコナデ、体部内面はヘラナデが行われているようである。その他の部位は摩耗が激しく調整の詳細はつかめない。浅黄橙色を呈し、胎土には1~2mm程度の長石がごくわずかに混ざる。胎土、色調は7に近い。9~11の土師器とは異なる胎土、色調の土器である。

9は竈の袖部から出土した土師器の甕である。口縁部の約1/2が残存するのみである。口径は20.2cmを測る。摩滅のため詳細は不明であるが、口縁部外面は横ナデにより調整が行われる。体部の調整は内外面共にハケである。焼成は良好で橙色を呈し、胎土には0.5~1mm程度の白色粒子が含まれる。形状や色調、胎土が11に近似する。なお、下記の10とは同一個体と考えられる。

10は竈の袖内部から出土した土師器の甕である。底部の一部が残存したのみである。底径は8.6cmで、底面には木葉痕が認められる。調整は内面がハケにより行われていることが観察できる。焼成は良好で、外面はにぶい橙色で内面は橙色を呈す。胎土には0.5~1mm程度の白色粒子が含まれる。色調、胎土とともに8、10に近い。

11は竈の袖内部からの出土した土師器の甕で、胴部の約1/4が欠けていたが完形に復原できた。この土器は頸部が「く」の字形に屈曲し、極わずかに肥厚する口唇部を持つ。体部はやや細長い球胴状を呈する。口径18.2cm、器高30.0cm、底径9.7cmで、最大径は体部の中央よりやや上にあり26.6cmを測る。調整は口縁部外面がヨコナデ、体部外面は左上から右下方向へハケによる調整が行われる。外面体部下端はヨコナデである。外面底部には木葉痕が認められる。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈し、胎土には白色粒子が多く混ざる。体部外面下半には煤が付着する。「駿東型の甕」と考えられる土師器である。

(3) SB-2の出土遺物 (図31-12~13)

SB-2からは竈周辺から土師器の高坏1点と甕が1点出土した。

12は竈の袖部から出土した土師器の高坏である。体部と脚部の約1/3が残存した。残存高は13.1cmである。坏部は浅黄橙色を呈し、内湾しながら立ち上がる。ただし、口縁部が欠損しているので全容は把握できない。残存する最大径は18.8cmである。脚部は上半が柱状で、裾部は屈折し「ハ」字状に緩やかに広がる。裾部はヨコナデによる調整が行われ、淡赤褐色を呈する。坏部、脚部共に胎土には1~2mmの石英粒子と3~7mm程度の礫が多く混ざる。

13は竈の燃焼室推定付近から出土した土師器の甕である。底部の一部が残存するのみであるが、底面には木葉痕があり、体部内面はハケ、外面はヨコナデにより調整が行われていることが観察できる。胎土は橙色で白色粒子が多く混ざる。SB-1から出土した図30-9~11と類似する色調と胎土で、「駿東型の甕」の底部と考えられる。時期は断言できないが、SB-1と同じく6世紀後葉~7世紀前葉であろう。

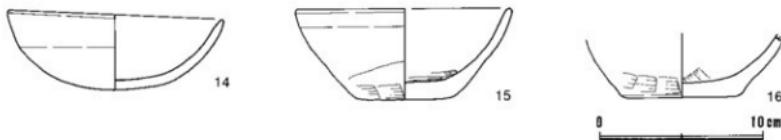


図32 SB-3出土遺物

(4) SB-3の出土遺物 (図32-14~16)

竈推定付近から土師器が3点出土した。14と15は壺で、14はSB-1出土の7と形態が類似するため6世紀後葉～7世紀前葉に位置づけられる。16も断定はできないが15との類似から壺と考えられる。

14は竈付近から出土した土師器の壺で、全体の約1/4が残存した。口径は13.0cm、器高は4.9cmである。底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、体部上半を極わずかに屈曲させている。口唇部はつまみ上げている。調整は内外面ともナデが行われるようであるが、摩耗が激しいため判然としない。にぶい橙色を呈し、胎土には1～4mmの大の礫が含まれる。体部外面は一部黒化している。

15も竈付近から出土した土師器の壺である。全体の約1/3が残存した。平底の底部から内湾気味に体部が立ち上がる。調整は体部内面がヨコナデ、体部外面上半はヨコナデで下半約1/3はヘラナデが施される。にぶい黄褐色を呈し、胎土には1～4mmの礫が含まれ、細かな白色粒子が混ざる。

16は竈付近から出土した土師器である。底部の約1/2が残存した。底部は平底で、体部は内湾気味に立ち上がる。調整は内面がヨコナデ、体部外面上半もヨコナデ、下半はヘラナデである。色調はにぶい黄褐色で、胎土には1mm程度の白色粒子がわずかに混ざり、1～3mm程度の礫も含まれる。壺の底部の可能性も高いが、14と似た形状を呈することから壺であると考えられる。

2. 平安時代以降の遺物

(I) SB-5の出土遺物 (図33～34-17～58)

住居跡床面直上と覆土から遺物が出土した。17～30が床面上の出土遺物、31～58が覆土からの出土遺物である。この内、17～24と31～56は灰釉陶器である。17は体部外面に墨書が認められる。25～30と57・58は土師器である。図示したもの以外にも、数点の灰釉陶器や土師器の細片が出土した。出土した灰釉陶器はいずれも折戸53号窯式に並行する東遠江窯のもので、10世紀前半に位置づけられる。

①床面上の遺物

17は住居跡の北西寄りで出土した灰釉陶器の椀である。全体の約2/3が残存し、口径13.5cm、器高3.95cmを測る。口縁部は外反し、底部は糸切り後にナデ調整が行われている。高台にはスノコ痕が見られる。軟質で黄褐色を呈し、発色はしていないが施釉の痕跡がある。体部外面には墨書が記されている。

18は住居跡の北西寄りで出土した灰釉陶器の椀で、全体の約1/3が残存した。外反する口縁部を持ち、口径13.7cm、器高4.15cmを測る。焼成は良好で灰色を呈する。施釉されてはいない。

19は住居跡北東寄りから出土した灰釉陶器の椀である。全体の約1/3が残存し、口径13.2cm、器高4.1cmを測る。口縁部をわずかに外反させる。焼成は良好で灰色を呈する。施釉はされていない。

20は住居跡北東寄りから出土した灰釉陶器の椀である。施釉の痕跡は見られなかった。体部から口縁部の約1/3が残存し、口径は15.3cmと推測される。焼成は良好で灰白色を呈する。

21は住居跡南寄りの中央から出土した灰釉陶器の椀で、体部の1/8程度が残存した。口縁部は外反するようである。灰白色を呈し、焼成は良好である。施釉の痕跡は認められなかった。

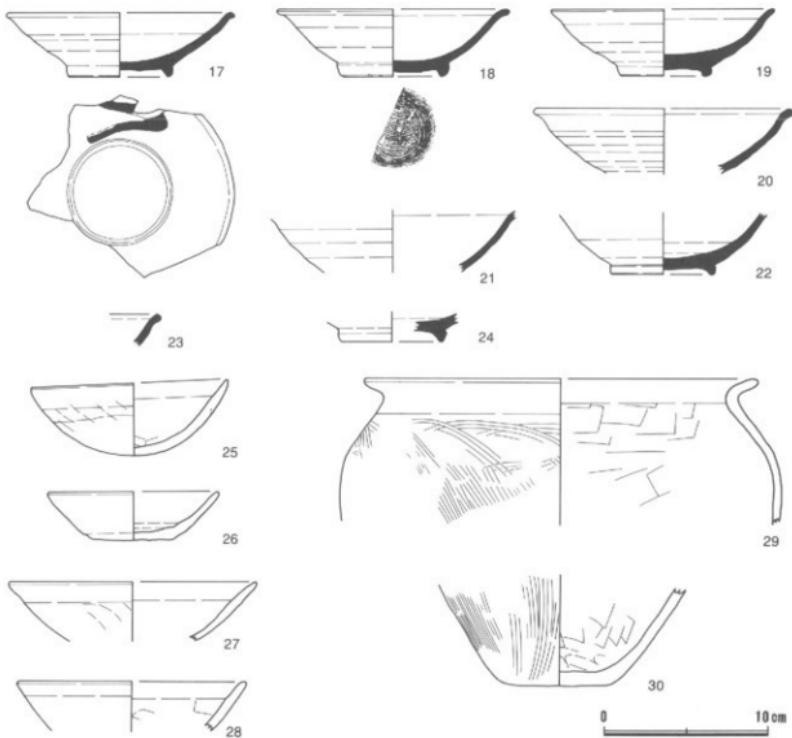


図33 SB-5 床面の出土遺物

22は住居跡中央の南東寄りから出土した灰釉陶器椀である。底部から体部の約2/3が残存した。灰黄色を呈する体部内面には施釉の痕跡が見られるが発色はしていない。底部は糸切りの後、ナデによる調整が行われている。

23は住居跡南東部の土坑の中から出土した灰釉陶器椀の破片である。わずかに外反する口縁部のごく一部が残存するのみである。焼成は良好で、灰オーラブ色である。施釉はされていない。

24は住居跡中央南寄りで出土した灰釉陶器椀底部の破片である。灰白色の外面底部には糸切り痕が認められ、焼成は良好である。

25は住居跡のほぼ中央から出土した土師器の坏で、全体の約1/3が残存した。口径は11.8cm、器高は4.7cmである。底部は丸底で、口唇部をつまみ上げている。調整は口縁部がヨコナデ、摩滅のため不鮮明であるが体部はヘラナデが行われているようである。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。

26は住居跡南側中央から出土した土師器の坏である。ほぼ完形に復原でき、口径10.4cm、器高2.2cmを測る。調整は体部の内外面にヨコナデであるが、その他は摩滅のため不明である。胎土は密で細かな白色粒子が含まれる。焼成はやや悪く、外面は灰白色、内面は灰黄褐色である。

27は住居跡中央部から出土した土師器の壊である。残存したのは口径15.0cmと推定される口縁部の約1/6で、つまみ上げる口唇部が確認できる。調整は摩滅のため判然としないが、口縁部はヨコナデのようである。焼成はやや悪く、浅黄橙色を呈する。胎土にはわずかに微細な長石の粒子を含む。

28は住居跡中央部から出土した土師器の壊である。口縁部の約1/3が残存し、口径は13.7cmと推定される。調整は摩滅のため不鮮明ではあるが、口縁部がヨコナデで体部はヘラナデにより行われる。内面は浅黄橙色で外面は赤褐色を呈し、胎土には微細な石英の粒子をわずかに含む。焼成はやや悪い。

29は住居跡南西部の土坑から出土した土師器である。口縁部から肩部の約1/2が残存し、口径24.0cm、頸径21.6cm、胴径26.9cmの甕に復原できる。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラナデである。外面の調整はハケにより行われ、肩部では横方向、胴部は左上から右下方向へ施される。焼成は良好で、明褐灰色である。胎土には微細な長石や石英の粒子がわずかに混ざる。

30は遺構の北東部から出土した土師器の甕の底部である。約1/3程度が残存した。内面はヘラナデにより調整が行われ、外面は縱方向のハケによる調整が行われる。焼成は良好である。にぶい赤褐色を呈し、外面には煤が付着する。色調や胎土、調整が29と近似しており同一個体の可能性が高い。

② 覆土からの出土遺物

31は灰釉陶器の椀で、全体の約1/3が残存した。口径13.5cm、器高4.6cmを測る。灰釉がツケガケで施釉されている。底部外面は糸切り後、ナデにより調整されている。胎土は密で微細な白色粒子をわずかに含む。焼成は良好であり、黄灰色を呈する。

32は口径14.4cm、器高4.75cmを測る灰釉陶器の椀である。全体の約1/4が残存した。口縁部はわずかに外反する。施釉の痕跡があるが、発色はしていない。底部は糸切りの後にナデによる調整が行われている。胎土は密で、細かな白色粒子が含まれる。焼成は良好で、灰黄色の土器である。

33~51は灰釉陶器の椀である。いずれも体部から口縁部にかけての細片であり、図上で復原を実施した。口径は12.5~15.0cmと推測される。口縁部の形状には若干の差異がみられ、33・36・39・42は口縁部を外反させ、40は口縁部の外反が見られず、その他のものはわずかに口縁部を外反させている。

発色はしていないが37は外面に灰釉が施された痕跡があり、42は施釉されている。34は体部外面に、38は体部内面に灰釉が付着していた。それ以外の土器には施釉の跡は見られなかった。

色調は33・35・36・39・42が灰白色、34は黄灰色、41・43・45・46・47は灰黄色、38・40・48・51は灰色、49は暗灰黄色、44はにぶい黄燈色、50は黄褐色である。焼成は37をのぞき、いずれも良好である。胎土には密で白色の微細粒子が含まれる。なお、36には径2mmの大の礫、46には径2mmの大の長石粒子も含まれる。33の口縁部には削痕が認められる。

52は住居跡南東の土坑覆土から出土した灰釉陶器椀の口縁部の細片である。焼成は良好で灰色を呈する土器である。

53は灰釉陶器の椀で、底部から体部の約1/3が残存した。体部の内外面には灰釉がツケガケにより施される。底部は糸切りの後、ナデにより調整が行われている。焼成は良好であり、灰白色を呈す。胎土は密で白色の微粒子が混ざる。

54・55は灰釉陶器の椀である。底部の細片であったため、共に図上で復原した。両者とも焼成は良好で、灰黄色を呈する。胎土は密で微細な白色粒子が混ざる。

56は灰釉陶器の小型甕である。頸部から口縁部は欠損していた。残存高は5.25cm、底径3.0cm、頸径1.3cm、最大径は胴部中央で4.4cmを測る。頸部はヨコナデ、胴部は丁寧なヘラケズリが行われ、底部にはヘラ記号が見られる。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土には微細な白色粒子が含まれる。

57は土師器の壊である。全体の約1/3が残存し、口径14.9cm、器高5.1cmを測る。底部は丸底、口縁部をつまみ上げる。調整は摩滅のため不鮮明であるが、口縁部はヨコナデで対部内外面はヘラナデのよう

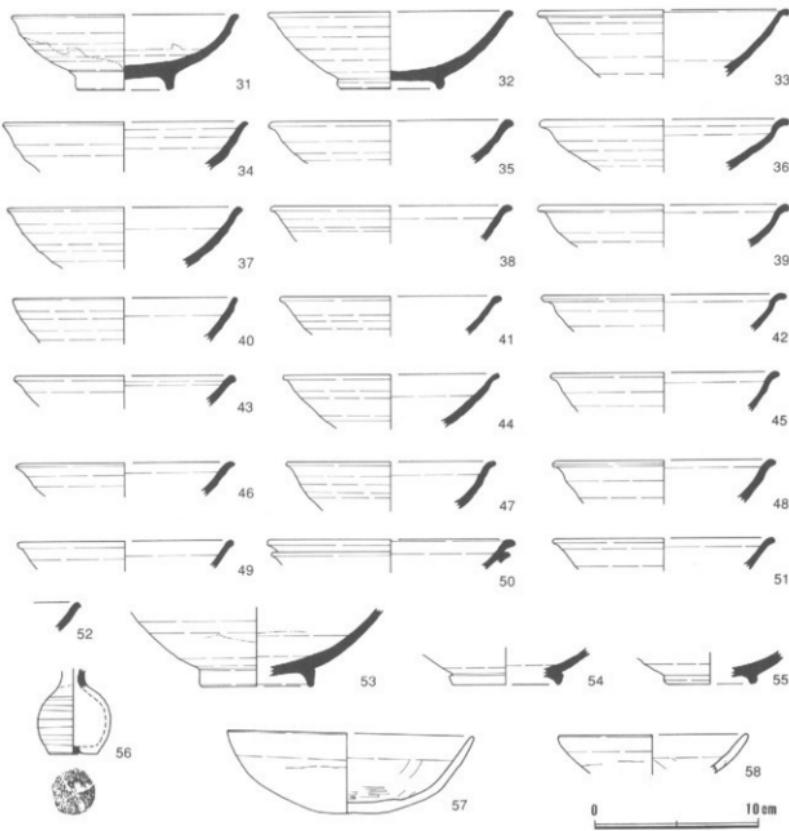


図34 SB-5 覆土の出土遺物

である。焼成は良好で、浅黄褐色を呈する。

58は土師器の環で、口縁部の約1/4が残存した。口縁部はヨコナデによる調整が行われ、口径は11.4cmに復原できる。焼成は良好であり、浅黄褐色を呈する。胎土には微細な長石の粒子が含まれる。

なお、SB-5出土灰釉陶器の中でも、17・18・36を始めとして他の灰釉陶器に比べ折戸53号窯式の中でも古手の要素を持つものが含まれている。

(2) SF-1の出土遺物（図35-59～60）

この遺構からは59・60が出土した。ともに遺構の覆土からの出土であり、流れ込みによる遺物と考えられる。

59は輥轆成形のカワラケである。口縁部の一部が欠損していたが、完形に復原できた。口径は9.8cm、底径7.6cm、器高2.3cmを測る。底部は糸切り、体部の内外面はヨコナデにより調整される。焼成は良好であり、にぶい橙色を呈する。14世紀代に位置づけられる。

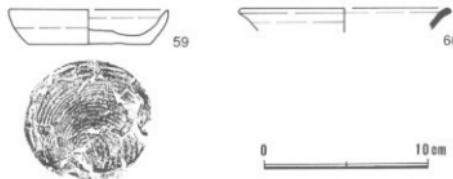


図35 SF-1出土遺物

(3) 挖立柱建物跡とその周辺の柱穴からの出土遺物 (図36-61~71)

掘立柱建物跡とその周辺の柱穴からは61~71の遺物が出土した^{viii}。この中で、61・64・67はSH-2の柱穴から、36はSH-3の柱穴からの出土である。

61はSH-2の柱穴SP-60から出土した。擂鉢部の破片で、志戸呂窯で生産された18世紀代に位置づけられる土器である。

62と63はSP-106から出土した。62は擂鉢口縁部の破片で、瀬戸・美濃窯で生産されたものである。時期は16世紀代に位置づけられる。63は志戸呂窯産の内禿皿で、17世紀前半に位置づけられる。

64はSH-2の柱穴であるSP-59から出土した布目瓦の破片である。

65~70は山茶椀である。いずれも東遠江で生産されたもので、12世紀中葉~13世紀に位置づけられる。

65はSP-91から出土した小皿の破片である。口径7.1cm、器高1.5cmを測る。66~68は椀の口縁部細片である。66はSH-3とSH-4に関連する柱穴SP-36から出土。67はSH-2の柱穴であるSP-60からの出土。68はSP-46から出土した。69~71は椀の底部である。69はSP-118からの出土、70はSP-91の出土である。

いずれも焼成は良好で、色調は65と70が灰白色、66と67が灰色、68が灰黄褐色、69が黄褐色である。

71はSP-90から出土した灰釉陶器の椀である。底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。焼成は良好で灰白色を呈する。

なお、細片であり図示できなかったが、SH-1の柱穴であるSP133からは山茶椀小皿、SH-3とSH-4に関わると考えられるSP-25とSP-80からは山茶椀が出土した。掘立柱建物跡に復原できなかった柱穴であるがSP-37からは山茶椀の小皿の破片、SP-49からはカワラケが出土した。

(4) 遺構外の出土遺物

① 1区の出土遺物 (図37-72~75)

1区からは表土除去中に72~75の遺物が出土した。72と73は灰釉陶器である。共に椀の底部で72は灰白色を呈し約1/4の残存、73は灰黄色を呈し1/2程度の残存である。両者とも底部外面に糸切り痕を残し、焼成は良好と言える。折戸53号窓式に並行する東遠江産の土器と言える。

74と75は共に灰釉陶器の椀底部の細片で、底部外面には糸切り痕が認められる。焼成は両者とも良好で74は灰白色、75は灰黄色である。74の内面には自然釉が付着する。72・73より新しく位置づけられる遺物である。1区出土の遺物はいずれも10世紀代と考えられる。

② 2区出土の遺物 (図37-76~81)

2区からは本調査時の表土除去中および確認調査時に76~81が出土した。

76は表土から出土した山茶椀の小皿である。全体の約1/4が残存し、口径は9.5cm、器高は2.9cmを測る。焼成は良好であり、黄灰色を呈する。胎土には白色微粒子が含まれる。

60は灰釉陶器の椀である。出土したのは口縁部細片であり、図上で復原を行った。口径は12.4cmと推定され、灰白色を呈し焼成は良好である。東遠江産のものと考えられる。

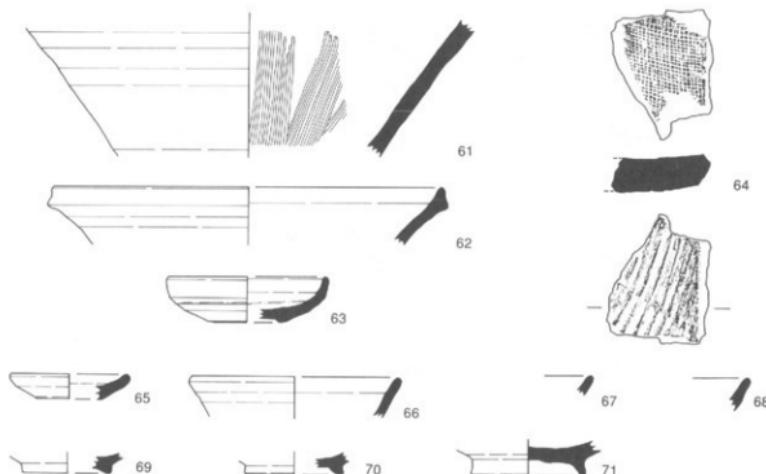


図36 SH-1～4とその周辺の柱穴からの出土遺物

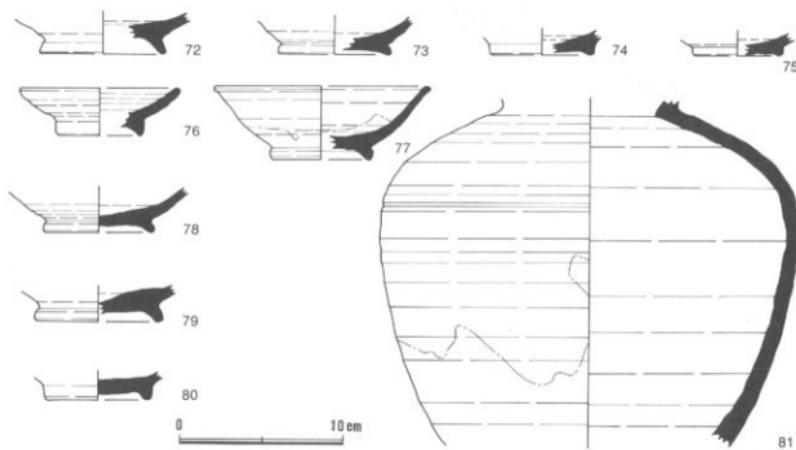


図37 1区・2区の遺構外出土遺物

77は表土から出土した灰釉陶器の椀で、全体の約1/3が残存した。口径12.9cm、器高4.5cmを測る。体部の内外面には灰釉がツケガケで施釉されている。底部は糸切りの後、ナデによる調整が行われている。焼成は良好で灰黄色の土器である。

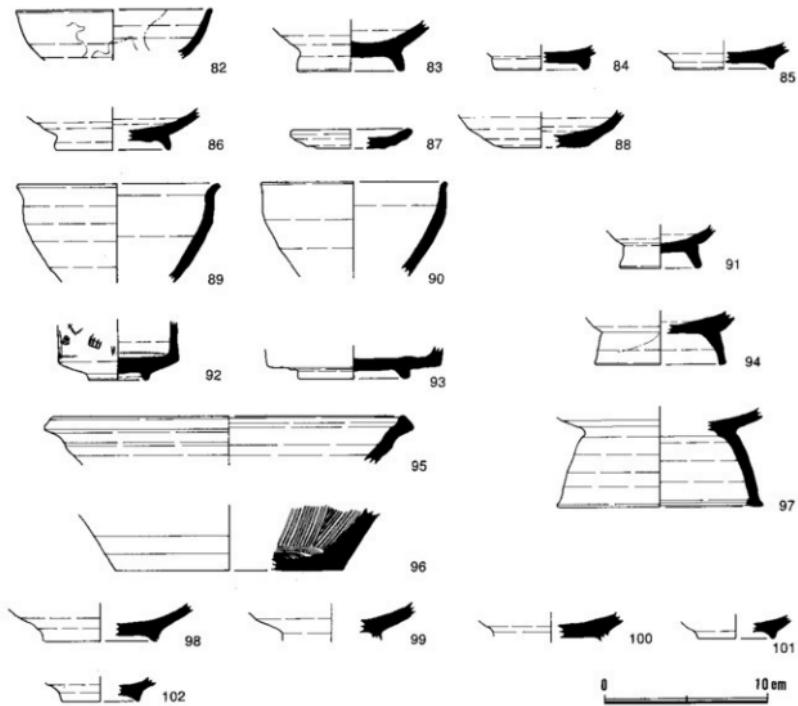


図38 3区・4区の造構外出土遺物

78～80は確認調査で出土した灰釉陶器の椀で、底部の一部が残存したのみである。80の底部は糸切りの後、ナデによる調整が行われている。胎土には2～5mm程度の小礫がわずかに含まれている。81は底部に糸切り痕が認められ、外面の体部から高台にかけて灰釉が流れた痕跡を残す。82は底部に糸切りの後、ナデによる調整が行われていることが確認できる。体部内面には自然釉が付着し、重ね焼きの痕跡が見られる。いずれも焼成は良好で、80は灰黄色、81は黄灰色、82は灰白色を呈する。

81は確認調査時に出土した灰釉陶器である。短頸壺と考えられるが、頸部から口縁部と底部を欠く。最大径は体部のやや上方にあり25.6cmを測る。焼成は良好であり、頸部から体部の中位に欠けて灰釉が施される。色調は灰白色で、胎土には1mm以下の白色粒子が含まれる。

2区で出土した山茶椀と灰釉陶器は東遠江で生産されたもので、76は12世紀前半～中葉、77～80は折戸53号窯式に並行する時期で10世紀前半に位置づけられる。81も同時期であろう。

③ 3区出土の遺物（図38-82～96）

3区では82～96の遺物が表土または搅乱土から出土した。

82～84は灰釉陶器の椀である。82は体部から口縁部の破片で、体部の内外面には灰釉がツケガケで施釉されている。83は底部の破片で、底部は糸切りの上にナデによる調整が行われ、体部内面には灰釉が施釉される。84も底部の破片である。いずれも焼成は良好で、83は白灰色、84は灰黄色を呈する。

82~84の灰釉陶器も他と同様に10世紀代に位置づけられる、東遠江産のものである。

85~88は12世紀前葉~13世紀前葉の山茶碗である。85と86は碗の底部の破片である。86はSB-4の搅乱土から出土した。共に焼成は良好であり、色調は灰色である。87と88は小皿である。87は全体の1/4程度の残存状況であった。口径は7.1cm、器高1.15cmを測る。底部は糸切り未調整である。88は底部の約1/3が残存した。底部は糸切り未調整である。共に焼成は良好で、灰色を呈する。

89~91は天目茶碗である。3点とも志戸呂窯で生産されたもので、89と91は17世紀前半~中葉に、90は17世紀中葉に位置づけられる。

92は陶胎の筒茶碗で、底部のみの出土であった。肥前系の土器である。93は志戸呂窯の香炉の底部である。94は志戸呂窯の碗の底部である。92~94は18世紀代に位置づけられる。95・96は擂鉢である。両者とも瀬戸・美濃窯で生産されたもので、95は18世紀、96は18世紀後半から19世紀に位置づけられる。97は志戸呂窯の仏龕の脚部で、18世紀に位置づけられる。

④ 4区出土の遺物（図39~97~102）

4区からは98~102の遺物が確認調査時に出土した。全て山茶碗の碗底部の破片である。焼成は良好であり、色調は98が灰白色、99と100が黄灰色、101と102が灰色である。いずれも東遠江で生産されたもので、12世紀代に位置づけられる山茶碗である。

註

- i 本報告書では横穴式石室の石室開口部の中央と奥壁の中央を結んだ線を主軸と捉え、開口部から奥壁を見た方向を主軸方向とした。
- ii 須恵器の型式は田辺1981に基づく。ただし、当遺跡出土の須恵器は大阪府南部古窯跡群で生産されたものは無いため、～型式並行期と表記する。また、本文中ではTK～、MT～等の略号を使用する。
- iii ここでは、竈の煙道と焚き口の方向を基準として住居跡の主軸方向を表記した。
- iv 竈の各部名称は谷1982に基づく。
- v 灰釉陶器は山下1995を参照した。なお、灰釉陶器・山茶碗については渋谷昌彦氏に御教授いただいた。渋谷氏からは、当遺跡から出土した灰釉陶器は清ヶ谷古窯跡群（大須賀町）で生産されたものであることを指摘された。
- vi カワラケについては松井一明1993を参照した。
- vii 「駿東型の壺」については北川1988を参照した。
- viii 近世陶磁器は足立順司1994、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1991を参照した。

表3 鉄鎌観察表

辨団	遺物番号	調査区	出土遺構	種別	残存長		巾		厚さ		備考	写真図版
					頭部(cm)	基部(cm)	頭部(cm)	基部(cm)	頭部厚(cm)	基部厚(cm)		
29	4	I区	20号埴石室内	鉄鎌	3.75	1.80	0.63	0.33	0.33	0.30	14	鍔状闊

表4 両頭金具観察表

辨団	遺物番号	調査区	出土遺構	種別	残存長(cm)	頭部巾(cm)	背金径(cm)	備考	写真図版
29	5	I区	20号埴石室内	両頭金具	2.50	0.55	0.40	14	

表5 玉類観察表

辨団	遺物番号	調査区	出土遺構	種別	全長(cm)	巾(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	写真図版
29	6	I区	20号埴石室内	切子玉	1.50	0.75~1.30	0.15~0.35	3.106	14	

表 6 土器觀察表

編目	遺物番号	附着部	出土遺物	種類	基盤	色調	口径 (cm)	高台径 (cm)	器径 (cm)	備考	写真図版
28	1	1 区	表土	灰土	灰土器	灰釉 2.5Y7/1 (灰白色)	14.8	—	3.7	輪径2.4cm	14
28	2	1 区	表土	20号堆裏面付近	灰土器	外面: 3Y1/1 (灰白色) 内面: 2.5Y7/2 (灰黄色)	—	—	—	20号堆行窓内から同一部位の断片出土	—
28	3	2 区	表土	20号堆裏面付近	灰土器	灰釉 N5/0 (灰白色)	—	—	—	—	—
30	7	3 区	S B 1 床面部	土師器	灰釉 外面: 2.5Y6/1 (暗灰白色) 内面: 10YR1/2 (にごい淡黄色)	12.5	—	4.5	須地圓錐形	14・15	
30	8	3 区	S B 1 床面土上	土師器	小判型 7.5YR4/4 (淡黄白色)	10.7	—	9.2	底径8.5cm、高台径0.7cm、器径12.1cm	14・15	
30	9	3 区	S B 1 床面部	土師器	要 6.25Y6/6 (褐色)	20.2	—	—	輪底面の變	—	
30	10	3 区	S B 1 床面部	土師器	要 外彌: 6.25YR6/6 (褐色) 内面: 5.75R4/4 (にごい褐色)	—	—	—	底径8.5cm、底部に木製板、輪底面の變	—	
30	11	3 区	S B 1 床面部	土師器	要 5YR4/4 (褐色) 5YR4/4 (にごい褐色)	18.2	—	20.0	底径9.1cm、底部に木製板、輪底面の變	15・16	
31	12	3 区	S B 2 罐	土師器	輪底 5.75R8/4 (淡黃褐色) 輪底: 2.5YR7/4 (淡赤褐色)	—	—	—	(底径8.0cm)	15・16	
31	13	3 区	S B 2 電線側面	土師器	要 内面: 7.5YR5/4 (にごい褐色)	—	—	—	(底径8.0cm)、底部に木製板、輪底面の變	—	
32	14	3 区	S B 3 罐	土師器	灰釉 7.5YR2/4 (にごい褐色)	13.0	—	4.9	須地圓錐形	15・16	
32	15	3 区	S B 3 罐	土師器	外縁: 10YR2/2 (にごい淡黄色) 内面: 10YR2/2 (灰黄色)	13.0	—	5.6	底径6.5cm、外縁底付近がうす黒ずんでいる。	15	
32	16	3 区	S B 3 罐	土師器	不分?	10YR7/3 (にごい淡黄色)	—	—	—	底部の輪底面がり、外縁底付近から体部にかけて部分的に黒ずんでいる。	15
33	17	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 2.5Y6/2 (灰黄色)	13.5	6.2	4.0	施輪の輪底作り(発色せず)、蓋ね始・スコ縫、黒縫	16	
33	18	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 2.5Y6/2 (灰黄色)	13.7	6.0	4.2	スコ縫	16・17	
33	19	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 SY6/1 (灰白色)	13.2	4.7	4.1	重ね治紙	16・17	
33	20	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 2.5Y7/1 (灰白色)	(15.3)	—	—	—	—	
33	21	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 2.5Y7/1 (灰白色)	—	—	—	—	—	
33	22	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 2.5Y6/2 (灰黄色)	—	5.8	—	施輪の輪底作り(発色せず)	16・17	
33	23	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 SY6/2 (灰オーバー色)	—	—	—	—	—	
33	24	2 区	S B 1 床面土上	灰陶輪器	輪 7.5YR7/3 (にごい褐色)	—	6.0	—	糸切り縫	—	
33	25	2 区	S B 1 床面土上	土師器	坏 7.5YR7/3 (にごい褐色) 内面の一端: 1.5YR1/2 (にごい赤褐色) 外縁: 2.5YR4/4 (にごい赤褐色)	11.8	—	4.7	体面はヘラナデか	16・17	

編目	遺物 番号	測量区	出土遺物	種別	断面	色調	口径 (cm)	高径 (cm)	備考	写真版
33	36	2区	S B 1床面直上	土師器	杯	外面：5YY1(底白色) 内面：N5/0(底色) 10Y R/2(底黄褐色)	10.4	—	2.2 底径4.8cm	17
34	37	2区	S B 1床面直上	土師器	杯	7.5YYR/3(底黄褐色)	(15.0)	—	—	17
33	28	2区	S B 1床面直上	土師器	杯	外面：1.5YYR/4(底黄褐色) 内面：DR5/3(底褐色)	(13.7)	—	—	17
33	29	2区	S B 1±0.9内	土師器	甕	7.1YYR/7/2(明褐色)	24.0	—	断面径21.6cm、腹径26.9cm、30と同一胴体外	17
33	30	2区	S B 1床面直上	土師器	甕	外面：1.5YYR/2(底白色)-7.5YYR/7/4 内面：1.5YYR/4(底白色)	—	—	底径6.3cm、外囲は底一帯直まで様付肩、23と同一胴体外	—
34	31	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/1(底黄色)	13.5	5.2	4.6 ツクガケで施釉、底部は斜切り裏ナデ、重ねる痕	17・18
34	32	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	14.4	5.8	4.8 施釉の痕跡有り(底色せず)、重ね施・スノコ底	17・18
34	33	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/1(底白色)	(15.0)	—	— 口縁部に削り有り	18
34	34	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/1(底黄色)	(14.7)	—	— 口縁部付近に削り有り	—
34	35	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	5YY/1(底白色)	(14.5)	—	—	—
34	36	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/1(底白色)	(14.5)	—	—	—
34	37	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/3(底黄色)	(14.0)	—	— 口外面に施釉の痕跡有り(底色せず)	—
34	38	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	5YY/1(底色)	(14.0)	—	— 全体内面に施釉有り	—
34	39	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/1(底白色)	(14.7)	—	—	—
34	40	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	5YY/1(底色)	(13.5)	—	—	—
34	41	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	(13.1)	—	—	—
34	42	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	3YY/1(底白色)	(14.3)	—	— 口外底の施釉の跡あり	—
34	43	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	(13.1)	—	—	—
34	44	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	10YYR/3(底に底黄褐色)	(13.0)	—	—	—
34	45	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	(13.7)	—	—	—
34	46	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	(12.6)	—	—	—
34	47	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄色)	(12.5)	—	—	—
34	48	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	5YY/1(底色)	(13.0)	—	—	—
34	49	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/2(底黄褐色)	(12.8)	—	—	—
34	50	2区	S B 1甕上	灰陶胸器	梅	2.5YY/3(底褐色)	(14.8)	—	— 外面に別個体の口縁部分が接着	—

測定番号	測定面番号	出土遺物	種別	輪縫	色調	口径 (cm)	高台径 (cm)	器径 (cm)	備考	写真図版
34 51	2区 SB1 土	灰陶輪縫	縫	2.5Y6/2 (米黄色)	(11.7)	—	—	—	—	—
34 52	2区 SB1±土砂土	灰陶輪縫	縫	5Y6/1 (米色)	—	—	—	—	—	—
34 53	2区 SB1 土	灰陶輪縫	縫	5Y7/1 (米白色)	—	6.8	—	—	ツケガケで施釉、裏は外板	17・18
34 54	2区 SB1 土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/2 (米黄色)	—	6.5	—	—	—	—
34 55	2区 SB1 土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/2 (米黄色)	—	5.0	—	—	—	—
34 56	2区 SB1 土	灰陶輪縫	小窓縫	7.5Y7/1 (米白色)	—	—	—	—	底径3.0cm、輪縫径1.3cm、側存高3.25cm、側存径4.4cm、 糸切りの上にツケガケ記号	17・18
34 57	2区 SB1 土	土輪縫	糸	7.5YR3/2 (淡青褐色)	14.9	—	5.1	—	—	18
34 58	2区 SB1 土	土輪縫	糸	10YR8/4 (淡黄褐色)	(11.4)	—	—	—	—	18
35 59	2区 SF1 土	土輪質土	カワラケ	7.5YR7/4 (淡黃褐色)	9.8	—	2.3	底径7.5cm、輪縫成形、糸切り痕	—	—
35 60	2区 SF1 土	灰陶輪縫	縫	7.5Y7/1 (米白色)	(12.4)	—	—	—	—	—
36 61	3区 SP40	近世輪縫	輪縫	2.5YR5/2 (淡黄褐色)	—	—	—	—	吉戸呂	19・20
36 62	3区 SP106	近世輪縫	輪縫	3YR4/1 (褐色)	(23.6)	—	—	—	志戸呂	19・20
36 63	3区 SP106	近世輪縫	無輪縫分	1.5Y5/3 (淡褐色)	(9.6)	—	2.8	(底径4.0cm)、志戸呂	—	19
36 64	3区 SP39	布目瓦	平瓦	—	—	—	—	厚さ1.8cm~2.0cm	—	20
36 65	3区 SP91	山茶輪	小窓	5Y7/1 (米白色)	7.1	—	1.5	(底径5.0cm)	—	19
36 66	3区 SP36	山茶輪	縫	3Y6/1 (米色)	(11.7)	—	—	—	—	—
36 67	3区 SP40	山茶輪	縫	3Y5/1 (米色)	—	—	—	—	—	—
36 68	3区 SP46	山茶輪	縫	10YR6/2 (淡黄褐色)	—	—	—	—	—	—
36 69	3区 SP118	山茶輪	縫	2.5Y6/2 (米黄色)	—	—	—	(底径5.4cm)	—	—
36 70	3区 SP91	山茶輪	縫	5Y8/1 (米白色)	—	—	—	(底径5.4cm)	—	—
36 71	3区 SP90	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/1 (米白色)	—	6.7	—	—	—	—
36 72	1区 表土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/1 (米白色)	—	7.1	—	—	—	—
37 73	1区 表土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/2 (米黄色)	—	6.6	—	重ね焼成、糸切り痕	—	—
37 74	1区 表土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/1 (米白色)	—	6.3	—	—	—	—
37 75	1区 表土	灰陶輪縫	縫	2.5Y7/2 (米黄色)	—	5.5	—	—	—	—
37 76	2区 表土	山茶輪	小窓	2.5Y6/1 (米灰色)	9.5	5.0	2.9	—	—	18
37 77	2区 表土	灰陶輪縫	縫	2.5Y6/2 (米黄色)	12.9	6.9	4.5	入ノコ縫、ツケガケで施釉	—	17・18

辨認	遺物	固有名	出土遺物	種別	器種	色調	口径 (cm)	高台性 (cm)	器径 (cm)	備考	写真図版
37	78	2区 表土	灰陶罐	碗	1.5Y6/1 (奥灰色)	-	6.5	-	-	-	-
37	79	2区 表土	灰陶罐	碗	2.5Y7/2 (灰黄色)	-	7.4	-	椭円形	-	-
37	80	2区 表土	灰陶罐	碗	5Y7/2 (灰白色)	-	6.2	-	自然釉付、頭ね地斑	-	-
37	81	2区 表土	灰陶罐	紅點器?	5Y7/1 (灰白色)	-	-	-	(輪底径10.6cm)、頭部から体部にかけて黒地	17・19	-
38	82	3区 表土	灰陶罐	碗	5Y7/1 (灰白色)	(11.9)	-	-	ツケガケで施錫	-	-
37	83	3区 表土	灰陶罐	碗	2.5Y7/1 (灰白色)	-	6.4	-	施錫	-	-
38	84	3区 表土	灰陶罐	碗	2.5Y6/2 (灰黄色)	-	5.8	-	-	-	-
38	85	3区 表土	山茶碗	碗	5Y6/1 (灰色)	-	6.0	-	-	-	-
38	86	3区 B4層見	山茶碗	碗	3Y6/1 (灰色)	-	7.0	-	-	-	-
38	87	3区 表土	山茶碗	小皿	1.5Y6/1 (灰白色)	(7.1)	-	1.2	(底径4.7cm)	-	-
38	88	3区 表土	山茶碗	小皿	5Y6/1 (灰色)	-	-	-	(底径5.4cm)	-	-
38	89	3区 表土	近世陶器	天目系碗	5YR5/4 (C-5.1)赤褐色	(12.3)	-	-	赤手口	19・20	-
38	90	3区 表土	近世陶器	天目系碗	施錫分: 2.5Y6/2 (灰黄色) 施錫分: 7.5Y5/3 (C-5.1)赤褐色	(11.2)	-	-	赤手口	19・20	-
38	91	3区 表土	近世陶器	天目系碗	7.5YR5/3 (C-5.1)赤褐色	-	4.9	-	赤手口	19	-
38	92	3区 表土	近世陶器	筒系碗	7.5YR7/1 (9.9)赤褐色	-	-	-	赤手口3.5cm、脚部径2.3cm、脚部幅細、把手柄	19	-
38	93	3区 表土	近世陶器	器部	10Y5/6/2 (灰黄色) 施錫分: 10YR4/4 (明褐色)	-	6.8	-	赤手口	19	-
38	94	3区 表土	近世陶器	碗	10YR5/2 (灰白色)	-	3.0	-	赤手口	19	-
38	95	3区 表土	近世陶器	罐	5YR5/4 (C-5.1)赤褐色	(21.4)	-	-	素手・美濃	19・20	-
38	96	3区 表土	近世陶器	罐	7.5YR8/3 (浅黄褐色)	-	-	-	(底径13.9cm)、素手・美濃	18~20	-
38	97	3区 表土	近世陶器	仏像器	外面: 10YR5/2 (灰黄色) 里面: 5YR7/3 (C-5.1)赤褐色	-	-	-	赤手口	19	-
38	98	4区 表土	山茶碗	碗	2.5Y7/1 (灰白色)	-	6.8	-	-	-	-
38	99	4区 表土	山茶碗	碗	2.5Y6/1 (灰褐色)	-	-	-	-	-	-
38	100	4区 表土	山茶碗	碗	5Y6/1 (灰色)	-	-	-	-	-	-
38	101	4区 表土	山茶碗	碗	5Y6/1 (灰色)	-	4.8	-	-	-	-
38	102	4区 表土	山茶碗	碗	5Y6/1 (灰色)	-	4.8	-	-	-	-

表7 20号墳石室計測表

埠固	遺構名	調査区	全長	奥壁幅	最大幅	主軸方向	出土遺物	備考
9・10	20号墳	I区	2.5m	0.3m	0.8m	N-30°-W	鉄鏃2・両頭金具1・水晶製 切子玉1・須恵器片	無袖式

表8 積穴住居跡計測表

埠固	遺構名	調査区	規模	床面積	主軸方向	出土遺物	備考
11~13	SB-1	3区東側	一辺5.3m	24m ²	N-50°-W	土師器5(坏1・小型壺1・ 壺3)	壇
14・15	SB-2	3区東側	主輪長6.8m (検出幅3.3m)	(46m ²)	N-53°-W	土師器2(高坏1・壺1)+	壇・石製支脚
16・17	SB-3	3区東側	主輪長4.6m (検出幅4.0m)	(22.5m ²)	N-50°-W	土師器3(坏2・壺?1)	壇
18	SB-4	3区東側	(検出長7.5m) (検出幅4.5m)	(34m ²)	N-44°-W	(搅乱層から山茶桜片1)	拡張あるいは連て替えの可能性あり
20~21	SB-5	2区	南北2.5m 東西3.0m	7m ²	N-9°-E	灰釉陶器33(壺32・小型壺 1)+・土師器5(壺6・壺2)+	焼土塗



図39 周辺の横穴墓・横穴式石室墳分布図 (1/200,000)

第IV章　まとめ

1. 古墳時代

古墳時代の遺構は1区で1基の横穴式石室、3区東側調査区で4軒の竪穴住居跡を調査した。遺物は古墳の副葬品として須恵器を始め、鉄鎌、両頭金具、切子玉が出土した。また、古墳の周辺と2区では須恵器が出土した。竪穴住居跡からは土師器が出土した。

(I) 古墳

今回実施した調査は星久保古墳群における最初の発掘調査である。今回の調査では、20号墳に墳丘など外部構造を知る手がかりとなるものは確認できなかったが、主体部は奥擣り形玄室の無袖式横穴式石室である事が判明した。遺物は石室内からは須恵器瓶類の破片と水晶製の切子玉1点、鉄鎌2点と両頭金具1点が出土し、墓道付近から8世紀前半に位置づけられる須恵器壺蓋1点が出土した。

石室内から出土した遺物からは明確な古墳の築造時期を得られなかった。ただし、墓道付近から出土した須恵器はこの古墳に伴うものと考えられ、築造あるいは追葬や墓前祭祀のいずれかの時期を示していると言える。

以上の調査成果から星久保古墳群における20号墳と星久保古墳群の位置づけを考えてみたい。

周辺の古墳の分布

星久保古墳群が立地する榛原郡榛原町坂口は「東遠江¹⁾」と称される地域に含まれる。東遠江において古墳時代後期の主たる埋葬施設として注目されているのは横穴墓であり、様々な研究の俎上にあがっている²⁾。一方、星久保古墳群を始めとして、横穴式石室が東遠江に存在する事も事実である。さて、東遠江を概観すると、駿河湾に注ぐ河川と遠州灘に注ぐ河川が存在する。そこで、ここでは東遠江の駿河湾に注ぐ河川（湯日川・坂口谷川・勝間田川・萩間川）流域を「東遠江東部」、遠州灘に注ぐ河川（茂川・新野川・菊川）流域と逆川流域を「東遠江西部」と呼称する。

周辺の横穴墓と横穴式石室の分布状況（図39）を見ると、駿河西部は横穴式石室で占められる地域と捉えられ、これに対し、東遠江西部では横穴墓が卓越する地域と捉えられる。両地域の中間に位置し、今回調査を実施した星久保古墳群を含む東遠江東部を見ると、多く存在するのは横穴式石室と言える。横穴墓が盛行する東遠江西部、横穴式石室が盛行する駿河西部と東遠江東部と位置づけられる。ただし、東遠江東部でも横穴墓が盛行する東遠江西部により近い萩間川流域では、横穴墓が分布している。勝間田川流域でも一群のみであるが横穴群が存在し、横穴墓が集中する東遠江西部に近いところほど、その影響を受けていると言える。

東遠江東部は横穴式石室が盛行する地域と横穴が盛行する地域の間で、一部に中間的な分布状況を示しながらも、横穴式石室を受容した地域と位置づける事ができる。東遠江でも星久保古墳群を含めて坂口谷川や湯日川、勝間田川流域は墓制の上では菊川・逆川流域よりも、同じく横穴式石室が集中する駿河西部と関係が深かったと考えられる³⁾。

さて、埋葬施設の差は「西遠江」と「東遠江」においてもみられることと、「西遠江」と「駿河西部」は海を媒介とした交流による埋葬施設の関連が指摘されている⁴⁾。星久保古墳群周辺は「東遠江」に存りながら墓制の上では駿河西部と関連深く、駿河西部と同様に「西遠江」の影響を受け、横穴式石室を受容した地域と考えられる。

星久保古墳群の分布

星久保古墳群は今回調査した20号墳を含め、20基の古墳が確認されており、さらに数基の古墳が存在する可能性も指摘されている。ただし、星久保古墳群は分布状況が示されているものの、発掘調査されたのは20号墳のみであり、他の古墳の築造時期や内容は不明である。そのため、古墳群内における20号墳の位置づけを副葬品や主体部の形状・規模から探ることは困難である。そこで、唯一示されている古墳群の分布状況から20号墳の性格を考えてみたい。

星久保古墳群の分布状況（図40）を見ると、複数の尾根上に分布し、地形と分布状況によって、2・7号墳、4～6号墳、8～11号墳、16・17号墳、18・19号墳のそれぞれのグループ⁴⁾に区分できる。今回、調査した20号墳は立地からすると、上記とは異なるグループに位置づけられる。20号墳の周囲には古墳の可能性が指摘されている地点があり、これらが古墳であるならば、20号墳とグループを成すものと考えられる。また、2～19号墳は標高30～40m付近に立地しているが、20号墳は標高50m付近に立地し、他の古墳に比べ高所に位置することも特徴的である。

主体部の形態・規模と副葬品

先にも述べた通り、主体部や副葬品を星久保古墳群内で検討する事は不可能である。そこで、周囲の横穴式石室を持つ古墳と対比を行う事にする。

まず、主体部である横穴式石室の形態であるが、星久保20号墳の石室形状は無袖式で奥擣り形の玄室を持つことが調査の結果明らかになった。星久保古墳群の周辺においては、この形状の石室は図41のように点在している。これらの古墳の築造時期はTK217～MT21型式併行期であるが、7世紀後半～8世紀前半に特に集中する。この地域に横穴式石室が導入されるのはTK10型式併行期で、MT21型式併行

期で終息を迎える⁵⁾。無袖式で奥擣り形玄室をもつ横穴式石室は、時期的には横穴式石室の中でも比較的新しい時期に築造が集中する形態と言えよう。星久保20号墳では石室内から時期を明確に示す資料は出土せず、時期を知る手がかりとなるのは墓道付近の表土から出土したMT21形式併行期の須恵器壺蓋のみである。これは上記の類似形態を持つ古墳の築造時期と隔たるものではない。星久保20号墳では、他に積極的に時期を窺える資料は無いため、8世紀前半を築造の時期と考えたい。

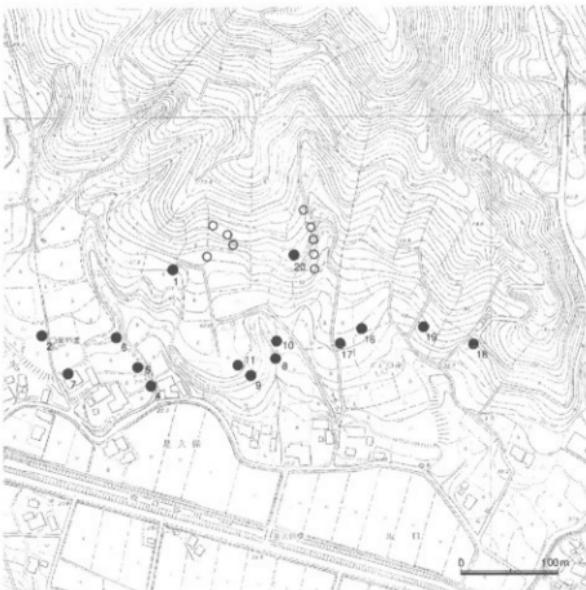


図40 星久保古墳群古墳分布図

石室の規模に着目すると、無袖式奥掠り形玄室の石室は最大でも全長3.5m程度である。概ね全長2.0~3.0m、最大幅0.6~0.8mの石室が多く、決して大きな横穴式石室とは言えない。無袖式奥掠り形玄室の石室は規模が小さい傾向にあると指摘できる。ただし、7世紀後半の横穴式石室の平均規模は駿河では3.23mと指摘されており^{vii}、この形態の石室が同時期において取り立てて小規模というわけではない。星久保20号墳の石室は全長2.5m、最大幅0.8mであり、同形態の石室では平均的な規模と言え、同時期の石室の中ではやや小振りと言える。

次に、星久保20号墳と同時期に造営される類似形態の横穴式石室における副葬品を見ると、数点の須恵器と一部ではこれに土師器や極少量の鐵鐵や刀子、装身具類が加わる程度である^{viii}。星久保20号墳では調査以前に破壊が進んでいたため、副葬品が散逸したとも考えられる。しかし、同形態の石室を採用する同時期の古墳においても副葬品が少ない事を念頭に置くと、元来副葬品の数量は少なかったと考えるべきであろう。

以上、星久保20号墳は石室の規模や形状、時期、副葬品からみると同時代の古墳では一般的なもの一つと言える。この古墳の被葬者は、この時期に古墳を造営できる人物としては平均的な階層であったと考えられる。

(2) 集落

豎穴住居跡

豎穴住居跡は4軒検出でき、この内3軒が竈をもつものであった。唯一、竈が検出されなかつたのはSB-4である。しかし、この住居跡は調査区外に遺構が続いている事は明白であり、竈が調査区外に存在することは十分考えられる。



図41 無袖式奥掠り形横穴式石室分布図

表9 周辺の無袖式奥掠り形横穴式石室一覧表

名称	石室規模(m)		築造時期	副葬品
	全長	最大幅		
1 星久保20号墳	2.5	0.8	MT21	鐵鐵2・切子玉1・須恵器(坏蓋1・瓶頸1)
2 水掛渡A-8号墳	3.5	0.7	不明	無し
3 水掛渡A-13号墳	2.8	0.6	不明	刀子1・不明鐵器
4 水掛渡A-15号墳	3.5	0.9	不明	無し
5 水掛渡C-3号墳	2.9	0.8	TK217~46	須恵器(坏蓋5・坏身6・高坏4・はそう1・小型短瓶1・蓋1・フラスコ形長瓶1)・刀子1・耳環1・勾玉2・丸玉10・東玉1
6 御小屋原I-1号墳	2.2	1.0	不明	無し
7 薩ヶ谷A-8号墳	2.1	0.8	不明	無し
8 薩ヶ谷B-1号墳	2.0	0.7	MT21	須恵器(坏蓋1・坏身2)
9 薩ヶ谷B-2号墳	2.2	0.8	MT21	須恵器(坏蓋5・坏身5・袋型横瓶1・台付長瓶2)
10 高草17号墳	2.7	0.8	7世紀後半	須恵器(平瓶1)
11 高草22号墳	2.0	0.8	7世紀後半	須恵器(平瓶1)
12 白砂ヶ谷B-2号墳	1.9	0.6	MT21	須恵器(坏身1・坏蓋1・高坏1・短瓶1・長瓶1)
13 白砂ヶ谷D-13号墳	2.5	0.8	7世紀後半	須恵器(台付長瓶2)・土師器(坏身4・小型罐2)
14 白砂ヶ谷D-15号墳	2.1	0.6	MT21	刀子1・須恵器(坏蓋4・坏身6・はそう1・台付長瓶1)
15 三ツ池3号墳	1.6	0.7	MT21	鐵鐵1・須恵器(坏蓋2・坏身2)
16 女池ヶ谷15号墳	2.0	0.8	不明	土解器片

今回の調査で検出した竪穴住居跡は全て方形の平面形態で、一辺の長さはSB-1が5.3m、SB-2が6.8m、SB-3が4.6m、SB-4が7.5mであり、SB-4が最大である。ただし、SB-4は全容が把握できず、立て替えの可能性もある。残る3軒の中で最大となるのはSB-2である。県内の古墳時代後期の集落の中には、大型竪穴住居（一辺7m前後）と数棟の竪穴住居（一辺4～5m前後）から構成される住居群という類型が存在する事を指摘されている¹³。今回調査した集落跡はこの類型に適合すると考えられる。今回の調査範囲は狭小であり集落として全貌は把握できなかったが、規模を見ると4軒の中ではSB-2とSB-4が大型で、SB-1とSB-3が一般的と言える。SB-4が重複あるいは立て替え等行われているならば大型ではなく、一般的竪穴住居跡と捉えるべきものであろう。なお、立地に着目するとSB-4はSB-1～3に対して若干離れており、別の住居跡群と捉えたい。

星久保古墳群における古墳時代の集落はSB-2を中心としたSB-1～3で構成される住居跡群とSB-4の属する住居跡群の少なくとも2つの住居跡群で形成される集落であったと考えられる。

遺物

SB-1では竈の袖部の構築材として甕が横位に据えられていた。この甕は所謂「駿東型の甕」である。「駿東型の甕」はSB-2でも出土し、今回の調査で出土した古墳時代の甕は全て「駿東型の甕」であった。「駿東型の甕」の分布は駿河東部～北伊豆に集中し、西は袋井市まで分布が及び、その初現は6世紀前半である事が指摘されている¹⁴。星久保古墳群の周辺では、近年、大井川町藤守遺跡、島田市中原遺跡、菊川町土橋遺跡で「駿東型の甕」の出土が報告され、東遠江¹⁵にもその分布が及んでいたことが改めて認識できる（図42）。そこで、駿河中部～東遠江出土の「駿東型の甕」と対比させ、当遺跡出土の「駿東型の甕」がどのような時期に位置づけられるか考えてみたい。



図42 駿河中部～東遠江の「駿東型の甕」出土遺跡

駿河中部～東遠江において「駿東型の甕」の初現的な出土例としてあげられるのは土橋遺跡SB-10、伊庄谷29号横穴、神明原・元宮川遺跡宮川3区SX-478・SX-481¹⁶で、6世紀後葉～7世紀前葉に位置づけられる。この中では供出する須恵器から井庄谷29号横穴が若干古く、宮川3区SX-478は若干新しく位置づけられる資料は藤守遺跡SB-3・SB-6出土遺物である。神明原・元宮川遺跡船堀地区流路Iも同時期であるが、前者より若干遅るようである¹⁷。7世紀末葉では藤守遺跡SF-7、8世紀前半では藤守遺跡SX-6と川合遺跡志保田地区SC-02・06の出土遺物があげられる¹⁸。最終段階の資料として中原遺跡SB-2出土遺物が8世紀中葉として報じられている。

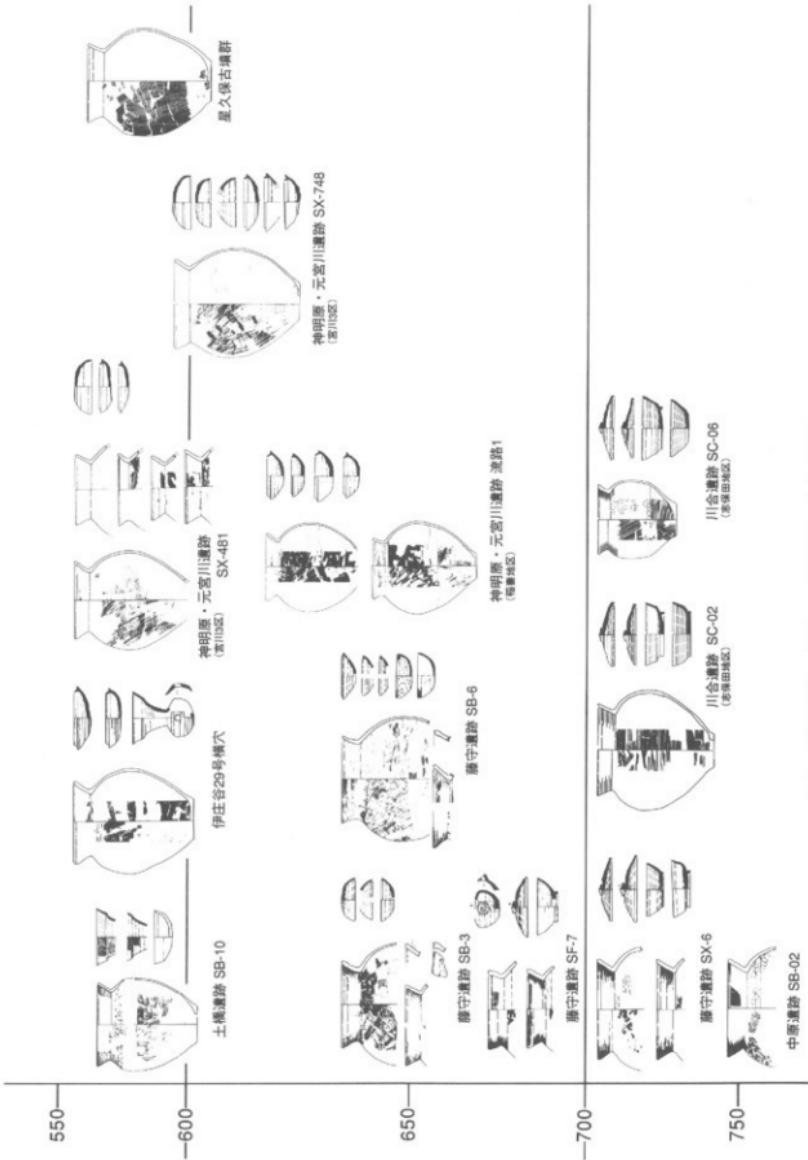


図43 駿河中部～東遠江の「鞍東型」の變遷図

次に、上記の資料と星久保古墳群SB-1出土の「駿東型の甕」を対比させる。比較に当たって、ここでは口唇部の形状に注目したい。口唇部の肥厚は「駿東型の甕」の特徴の一つとされている。駿河中部～東遠江における6世紀後半～7世紀代前葉の資料を見ると、口唇部を内側に段を持つように僅かに肥厚させ、かつ口唇部の外縁に比べて内縁の方が高くなるものが大勢を占める。その一方で7世紀中葉以降は北川1988に指摘されるように断面三角形状のものが多くなると共に、口唇部の内縁が外縁より高くなるものは非常に少なくなる。星久保古墳群出土のものは口唇部の内側を僅かに肥厚させ、内縁が外縁より高く、古く位置づけられる要素を持つ。当遺跡出土のものは周辺遺跡との比較では6世紀後葉～7世紀前葉と位置づけられる。「駿東型の甕」については県東部地域を中心に研究を行った北川1988の成果があるのでこれとも照らし合わせることにする。この中では8段階の区分がなされ、1～4段階が6～7世紀代に相当する。1段階が定型化する以前の「駿東型の甕」で6世紀前半、2段階が6世紀後半で口唇部の肥厚が明確になる時期、3段階が7世紀前半で球胴化や口縁部と副部の器壁の厚さの差が明確になり、口唇部は断面三角形状が多くなる段階としている。星久保SB-1は球胴化が進んでいない事と、胴部と口縁部の器壁の厚さに差が少ない事から2段階に相当すると言え、6世紀後半と位置づけることができる。以上、周辺遺跡との対比と北川1988の両者から星久保古墳群SB-1出土の「駿東型の甕」は6世紀後葉～7世紀前葉に位置づけられ、遅く見ても7世紀中葉を下るものではない^{xvi}。

この土器は竈袖の構築材として利用されており、SB-1では竈の作りかえを示す根拠もないため、この土器の年代をもって住居跡の年代とすることができる。また、SB-1と同じ群を形成するSB-2・3もほぼ同一年代を想定できる。時間幅を多くみても今回調査した古墳時代の集落跡は6世紀後葉～7世紀前葉と位置づけられる。

なお、この竪穴住居群は竈が火を受けてはいながらも焼成は弱いことが特徴の一つとしてあげられる。このことから、竈の使用が少なく、長期間の居住は考え難い。

(3) 古墳と集落の関係

今回の調査ではほぼ同時期の古墳と集落を調査することができた。時期的には6世紀後葉～7世紀前葉が考えられる集落であり、一方20号墳は8世紀前半のものである。ただし、古墳群の形成はそれ以前から始められていた事も考えられる。2区で表採した須恵器（図28-3）は7世紀中葉に位置づけられる。これが、調査区外に存在する古墳に伴うものであるか、集落に伴うものであるかは確証を得ないが、2区の周辺には16号墳や17号墳が存在している事から、古墳に伴う遺物である可能性も高い。古墳に伴う遺物であれば、古墳群の形成が7世紀中葉には行われていたと考えることができる。この場合、この集落の居住者が古墳の被葬者であるとまでは言い切れないが、密接な関連があったと推察される。

2. 平安時代～鎌倉時代初頭

2区で10世紀前半の竪穴住居跡1軒と14世紀以降の土坑1基を検出し、3区西側調査区で12世紀代に位置づけられる3棟の掘立柱建物跡を調査した。

(I) 竪穴住居跡

2区で検出した竪穴住居跡のSB-5は竈が存在せず、中央部に強く焼成を受けた箇所が存在した。遺物は灰釉陶器と土師器が出土した。灰釉陶器は楢が大勢を占め、中には体部外面に墨書きの認められる物も存在した。楢以外の灰釉陶器としては、覆土から出土した小型の壺が存在した。土師器は楢の他、甕が出土した。出土した灰釉陶器は折戸53号窯式併行期に位置づけられ、遺構の時期は10世紀前半が与えられる。ただし、一部の灰釉陶器は折戸53号窯式でも比較的古い要素を持つことから10世紀前半代でも、より古い時期と位置づけたい。

SB-5は上記のように、竈を持たず床面に直接焼成を受けた箇所が存在すること、規模の割に遺物が集

中し、中には特殊な物も含まれる事が特徴としてあげられる。また、今回実施した調査範囲は狭長であるため、断言はできないものの調査範囲内には同時期の遺構が存在していないことも特徴的である。このような遺構と出土遺物の状況から一般的な住居ではなく、むしろ別の一般的な住居跡とは異なる性格が考えられ、竪穴状遺構と称すべきものであるのかもしれない。ただし、これがどのような性格を持つ遺構であるかは特定できない。

なお、この地域は律令期には遠江国榛原郡となる。SB-5の想定年代と同時期の10世紀前半に成立した史料である『後名類聚鈔』には榛原郡内に質俗・驛家・榛原・大江・細江・神戸・船木・勝田・相良の9つの郷が存在した事が記されている^{xvii}。星久保古墳群が所在する坂口は島田市1996では船木郷、榛原町1988では神戸郷に比定されている。今回の調査からは郷名を探る資料は得られなかったが、律令期にこの地域に人間の営みがあった事に確証を得た事は今回の調査成果の一つといえる。

(2) 堀立柱建物跡

3区東側調査区で検出されたSH-1・3・4は柱穴出土の遺物から12世紀代を想定した。これらの掘立柱建物は柱穴間距離に均一性を欠き、SH-3・4では幾度の立て替えが認められることから、比較的簡素な建物であったと想定される。今回の調査から得られた資料は少ないので、同調査区内では建物跡に復元できた柱穴以外にも多くの柱穴が存在し、さらに幾つかの建物が存在した可能性が考えられる。また、調査区周囲の段丘平坦部でも山茶椀が表探でき、この付近一帯に古代から中世にかけての遺跡が広範囲に広がっていることが予想される。なお、この時期この地は初倉荘に含まれ、遺跡の北西にある高尾山・物見塚を中心に東西に列なる丘陵に初倉荘と質俗牧との境をなす「坂口中山」があったと言われている^{xviii}。これまで、この時期のこの地域については初倉荘に含まれることが文献から触れられる程度であった。今回の調査でこの時期の資料が得られた事は、この地域の歴史を考える上で新たな側面を加えたと言えよう。

3. 近世以降

3区北西調査区で検出されたSH-2がこの時期で、柱穴より出土した遺物から18世紀に位置づけられる。この調査区では建物に復元できなかったもののSH-2と同時期と考えられる柱穴が幾つか存在し、これらの柱穴からも遺物が出土している。また、表土や搅乱層からも近世の遺物が出土している。これらの遺物を見ると、多くが志戸呂窯で生産されたものであるが、一部に肥前系のものや瀬戸・美濃窯で生産されたものも含まれている。遺物の時期は17世紀～18世紀のものが中心であるが、一部16世紀代のものや19世紀まで下る可能性を持つものも含まれる。

なお、3区西側調査区の付近は地元で「こくぞうさん」と呼ばれる虚空蔵菩薩を奉った寺があったと伝えられている。この寺がどのような経緯で、どのくらいの期間存続していたかは定かではない。今回の調査結果からは十分な根拠を欠くので断定はできないため、ここではその可能性を指摘するにとどめるが、3区西側調査区の近世遺構と遺物は、この寺跡に関連する可能性がある。出土遺物の時間幅を考慮すると、17世紀には存在していた可能性が高く、あるいは16世紀まで遡ることも考えられる。

4. 結語

坂口谷川流域では遺跡の存在は知られていても、これまで発掘調査が行われた事は少なく、その内容は不明な点が多くあった。今回の調査では古墳時代から近世にかけての遺構・遺物を調査し、中でも古墳時代後期の集落跡と古墳を調査できたことは被葬者とその集落を考える上で貴重な資料となりえた。律令期になると榛原郡として遠江国に組み込まれるこの地域であるが、古墳時代後期における墓制や遺物は、むしろ東遠江西部よりも駿河との関連を読みとれたことは興味深い。

また、平安時代の遺構はその性格を特定する事はできなかったが、一般的な住居跡とは異なる性格を持つことが指摘できた。今回の調査範囲周辺では古代から中世にかけての遺物が広く採取でき、この時期の遺跡が広がる可能性が高い。今後、これらが調査され、坂口谷川流域の歴史像をより詳しく解明されることを期待したい。

註

- i 本報告書では地域の名称と範囲について、便宜的に以下のように区分した。東遠江は掛川市・小笠郡・榛原郡と島田市の大井川右岸、駿河西部は大井川左岸の島田市と藤枝市・焼津市・志太郡、駿河中部は静岡市・清水市、駿河東部は庵原郡・富士市・富士宮市・駿東郡・沼津市である。なお、郡・市の名称と範囲は2002年4月1日現在の行政区画である。
- ii 静岡県教育委員会1983、静岡県考古学会2001他
- iii 律令期の城御郡・佐野郡が東遠江西部、榛原郡が東遠江東部とほぼ重なる。律令期には遠江国となる榛原郡であるが、古墳時代後期の墓制では駿河の志太郡・益津郡との関連で考える必要があるだろう。
- iv 鈴木一2001、なお、ここで扱われている「西遠江」とは浜松市・磐田市周辺とされ、「東遠江」は掛川市を中心とした一帯、「駿河西部」は本報告書でいう西駿河に相当する地域を指している。
- v このグループ分けはあくまでも、見かけ上の古墳のまとまりとして捉えただけであり、所謂単位群や単位小群として捉えられるものは、調査が行われていないため不明と言わざるをえない。
- vi 菊池・田村2001他
- vii 大谷2000、8世紀前半の規模については記されていないが、時期が下るにつれ規模が縮小する傾向が指摘されていることから、8世紀前半ではこの数値を下回ることが予測される。
- viii やや時期の遅る水掛渡C-3号墳では、この形態の石室の中では最も副葬品が豊富である。それでも、威信材と捉えられる遺物は出土していない。
- ix 白澤1995、集落内の住居跡群については、他に、均一的な規模の堅穴住居のみで構成される住居群、堅穴住居と掘立柱建物で構成される住居群、掘立柱建物のみで構成される住居群が類型として提示されている。
- x 「駿東型の壇」については北川恵一1988を参照とした。「駿東型の壇」の分布は磐田市長江町遺跡においても7世紀代の遺物と供に駿東型の壇と類似した資料の出土が報告され(磐田市1996)、分布がさらに西に広がることも想定される。なお、「駿東型の壇」という名称に対しては「6世紀～7世紀前半まで駿河西部でも駿東型壇の存在が一貫として確認できる」とから「駿河型壇」と改称したほうがより適切とも指摘されている(松井1995、ここでの駿河西部は静清平野以西を指している)。指摘のとおり「駿東型の壇」は古墳時代後期～奈良時代の駿河で広く見られる土師器壇の一つと言えるが、本報告書では広く通用している「駿東型の壇」を使用する。
- xi 静岡県1994・大井川町1984によると、律令期における大井川の主流は現在の流路に比べてより北側を流れ、現在の堀山川・堀川の流路をとつて田尻浜から駿河湾に注いでいたとされている。また、藤守遺跡の所在する大井川町は律令期には遠江国に属し榛原郡であったとされている。古墳時代後期における景観が律令期のものと合致するかは不明であるが、藤守遺跡を東遠江に含めた。
- xii 神明原・元宮川遺跡ではここで取り上げた以外にも多数の「駿東型の壇」出土遺構がある。松井1995では神明原・元宮川遺跡水上6区SR-810出土の「駿東型の壇」を6世紀後半としている。なお、本文で示した年代は供出する須恵器から判断した。
- xiii 伊庄谷29号横穴は供出する須恵器が遠考研編年のⅢ期中葉（遠考研編年（山村他1968）のⅢ期中葉はTK43形式に併行）、土橋遺跡SB-10は6世紀代と報告されている。宮川3区SX-481は7世紀前半の投棄と報告され、6世紀中葉に遡る遺物も見られるが、下限を示す資料から6世紀後葉～7世紀前葉と考えた。宮川3区SX-478は6世紀末～7世紀初め頃の投棄で、供出している須恵器はシンボジウム編年Ⅲ期後葉と報告されている（シンボジウム編年（川江1979）Ⅲ期後葉はTK209形式に併行）。
- xiv 藤守遺跡SB-3・6の出土遺物は大半が流入であると報告され、稻妻地区流路Iも流路であることから、時期を断定するには難があることは否めない。ただし、供出する須恵器が前者ではTK217～46形式併行期に限られ、後者では一部TK209形式併行期が推定されるがTK217～46形式併行期が中心であることから7世紀中葉と捉えた。
- xv 藤守遺跡SF-7出土の土器群は7世紀末葉と報じられている。SX-6は古墳時代末期から奈良時代にかけてと報じられ、同遺構から出土した須恵器はMT21型式併行期が主体となるので8世紀前葉と捉えた。川合遺跡志保田地区SC-06は8世紀第1四半期でSC-02も併行する時期と報告されている。
- xvi 県東部の土師器を編年した山本1989ではⅡ期、山本1993ではⅢ期第2段階に適合すると考えられる。これらの年代も6世紀後半とされている。なお、胎土は当遺跡出土の「駿東型の壇」は藤守遺跡出土の土器に近い。
- xvii 高山寺本には駿家郷の代わりに初倉駅が記され、神戸郷は記されていない。名古屋市博物館本には駿家郷が記載されている。
- xviii 静岡県1994によると、大治三年八月日藤原永範寄進状案に記された賛侶牧の南限「坂口中山」を現在の島田市船の島の鳥足ゴルフ場西線の道から榛原町村の坂口神社に越える山としている。また、治承三年三月日湯日郷四至注文案に記された湯日郷の南限「八条院御坂口境巖峯」をこの丘陵稜線に当てている。なお、同文献の845頁では12世紀前半は初倉荘の莊域が坂口谷地域まで及んでいなかった可能性も指摘されている。

参考文献

- 足立順司 1994 「消費地出土の初山・志戸呂焼」『地域と考古学』
- 磐田市教育委員会 1996 『長江崎遺跡発掘調査報告書』
- 大井川町史編纂委員会 1984 『大井川町史』上巻
- 大谷宏治 2000 『遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造』
『研究紀要』第7号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 川江秀孝 1979 『静岡県下の須恵器について』『須恵器－古代陶質土器－の編年』 静岡県考古学会
- 菊川町教育委員会 2001 『土橋遺跡』
- 菊池吉修・田村隆太郎 2001 『駿河・伊豆の後期古墳』
『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 北川恵一 1988 『「駿東型の壘」の出現と終末について』
『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『大谷川』II (遺構編)
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『大谷川』(稻妻地区)
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『大谷川』III (遺物編)
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 『原川遺跡』IV
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『瀬名遺跡』III (遺物編 I)
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『川合遺跡志保田地区』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999 『水掛渡古墳群C群』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『中原遺跡・宮裏遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『藤守遺跡』
- 静岡県 1994 『静岡県史』通史編 I 原始・古代
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』
- 静岡県考古学会 2001 『東海の横穴墓』 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- 静岡県文化財保存協会 1965 『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』
- 静岡市教育委員会 1984 『駿河・井庄谷横穴群』—南支群第4次発掘調査—
- 島田市教育委員会 1996 『島田風土記 ふるさと初倉』 島田市史編さん委員会
- 島田市教育委員会 1998 『御小屋原I遺跡・中原遺跡』
- 清水市教育委員会 1984 『天神山下遺跡』III
- 清水市教育委員会 1999 『清水市内遺跡群発掘調査報告書』
- 白澤 崇 1995 『古墳時代後期の集落』『古墳時代の集落』 静岡県考古学会
- 鈴木一有 2001 『遠江における後期古墳の特徴』
『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 谷 旬 1982 『古代東国のかまど』『研究紀要』7 財団法人千葉県文化財センター
- 棟原町史編纂委員会 1988 『静岡県棟原町史』中巻
- 藤枝市教育委員会 1980 『市部古墳群山ノ上支群 蔽田古墳群三ツ池支群』
- 藤枝市教育委員会 1980 『原古墳群白砂ヶ谷支群』
- 藤枝市教育委員会 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』II
- 藤枝市教育委員会 1981 『原古墳群谷稲葉支群高草地区』

藤枝市教育委員会 1990 「女池ヶ谷古墳群」

松井一明 1993 「久野城出土の陶磁器・土師質土器が提示する諸問題」『久野城』IV

静岡県袋井市教育委員会

松井一明 1995 「第2節遺物について」「坂尻遺跡」—遺物・総括編— 静岡県袋井市教育委員会

山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

山村宏 他 1968 「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50

山本恵一 1989 「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」

『沼津市博物館紀要』13 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館

山本恵一 1994 「駿河湾東部の古墳時代の土師器について」『地域と考古学』

現地調査及び報告書の作成にあたって多くの方々に御協力をいただいた。次の機関及び方々からは有益な御指導、御助言を賜った。記して感謝申し上げる。(敬称略・五十音順)

河合修・櫻井典啓・篠ヶ谷路人・柴田稔・鳩野雄康・棟原町教育委員会

写 真 図 版

遺跡の遠景 図版 1



1. 遺跡の遠景（南から）



2. 調査区遠景（東から）

図版2 20号墳



1. 20号墳から南を望む



2. 20号墳遠景（南から）



1. 検出状況（南から）



2. 石室検出状況（南から）

図版4 20号墳



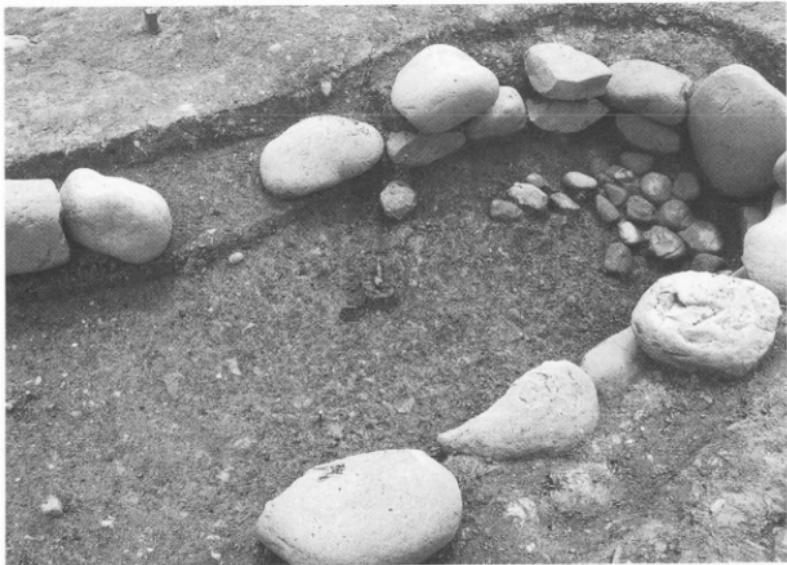
1. 石室東壁（西から）



2. 石室西壁（東から）



3. 石室奥壁（南から）



1. 鉄製品出土状況（南東から）



2. 石室基底石（南から）



3. 石室掘り方（南から）

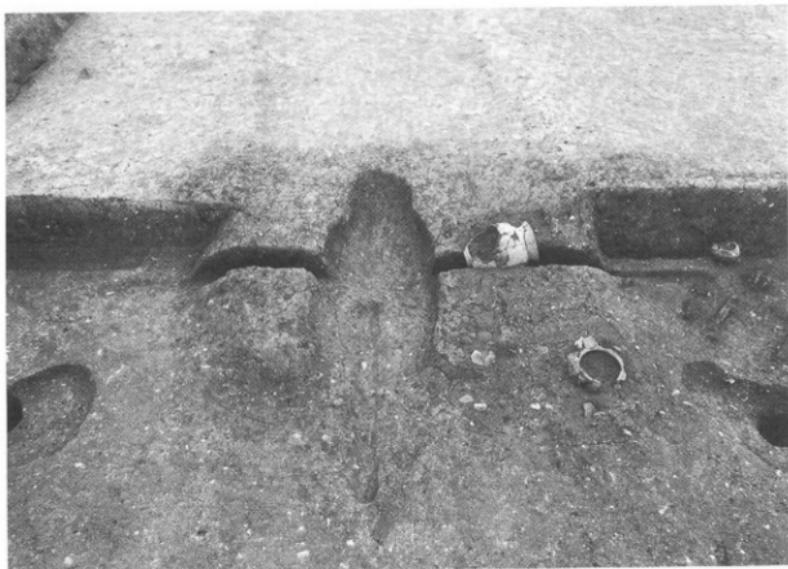
図版6 SB-1



1 . 3 区全景 (北から)



2 . SB-1 全景 (南東から)



1. 壕付近遺物出土状況（南東から）



2. 壕（南東から）

図版8 SB-1



1. 炭化材の検出状況（北東から）



2. 完掘状況（南東から）



1. SB-2 全景（南東から）



2. 窟（南東から）

図版10 SB- 3



1 . SB- 3 全景 (南東から)



2 . 壺付近の遺物出土状況 (南から)

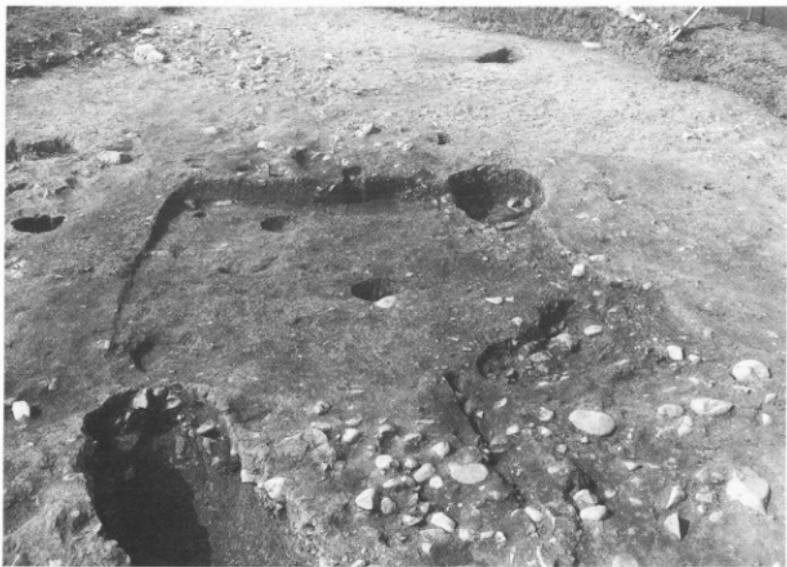


1. SB-4 全景（南東から）



2. 2区全景

図版12 SB-5



1. SB-5 全景（南から）



2. 遺構北側の遺物出土状況（西から）



1. 3区西側調査区全景



2. SH-3・SH-4 全景 (東から)

図版14 20号墳・SB-1 出土遺物



1区の主な出土遺物



20号墳石室内出土遺物



SB-1出土遺物



古墳時代竪穴住居跡の主な遺物



15



16

SB-3 出土遺物

図版16 SB- 1 ~ 3 + 5 出土遺物



SB- 1 出土 (11)、SB- 2 出土 (12)、SB- 3 出土 (14)、SB- 5 床面直上 (17~19 + 22 + 25)



2区の主な出土遺物



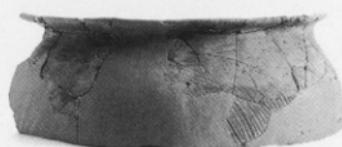
26



28



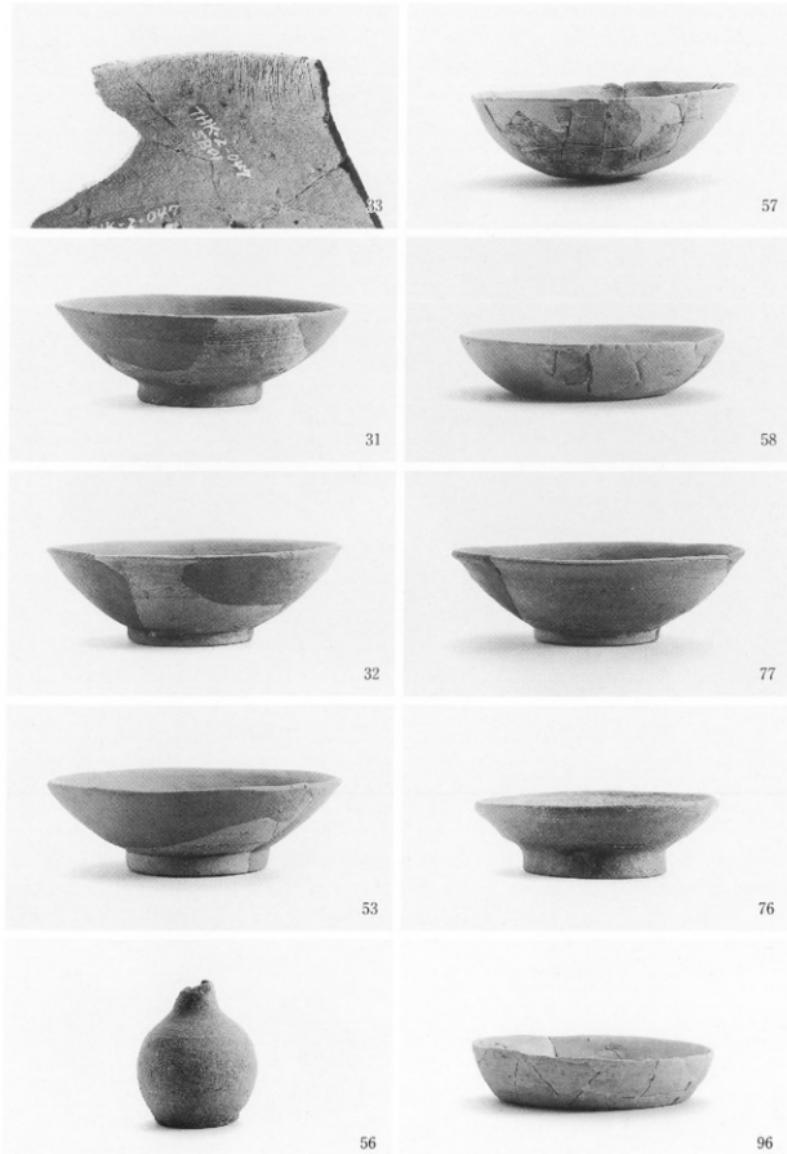
27



29

SB-5 床面直上の出土遺物2

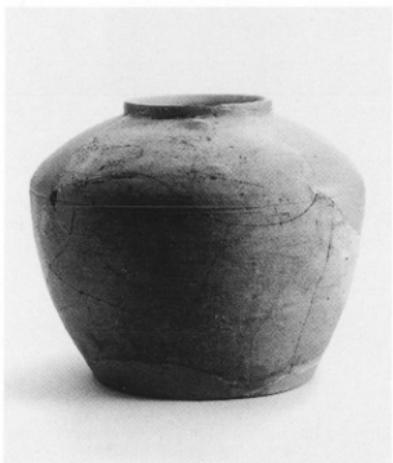
図版18 2区出土遺物 2



SB-5 覆土出土 (31~33・56~28) SF-1 出土 (59)、遺構外の出土 (76・77)



3区の主な出土遺物



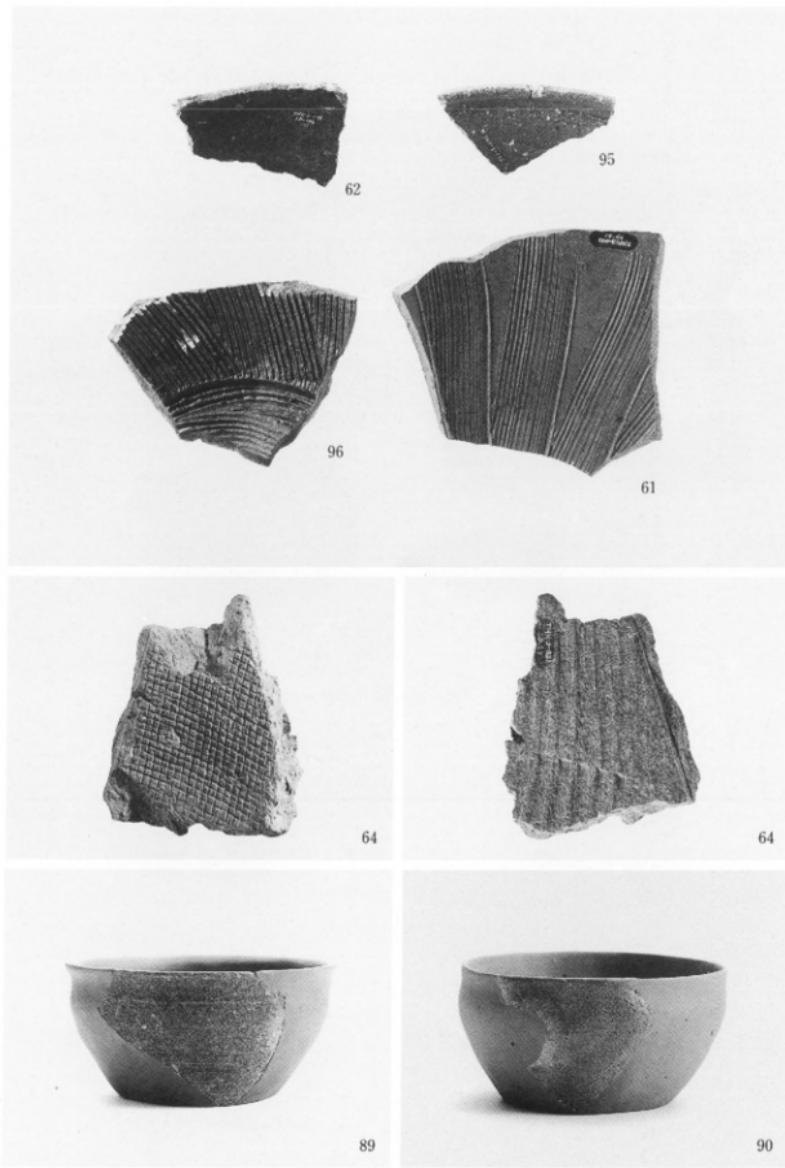
65



63

2区遺構外の出土 (81)、SP-106出土 (63)、SP-91出土 (65)

図版20 3区出土遺物



SP-60出土 (61)、SP-106出土 (62)、SP-59出土 (64)、遺構外の出土 (89・90・95・96)

報告書抄録

ふりがな	ほしくぼこふんぐん（しづおかくうこうおうだんどうろはいばらちく）							
書名	星久保古墳群（静岡空港横断道路桜原地区）							
副書名	平成12年度静岡空港県単独空港整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
編著者名	菊池吉修							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹							
発行年月日	西暦 2002年12月27日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°'	°°'			
星久保古墳群	静岡県榛原郡榛原町坂口	22423		34度 47分 4秒	138度 11分 53秒	20000401 20000930	2,891	静岡空港 県単独空港整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
星久保古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室1	須恵器・切子玉1・鉄鏃2・両頭金具1			小規模の横穴式石室	
	集落	古墳時代後期	堅穴住居跡4	土師器（壺・壺・高壺）			竈を持つ堅穴住居跡3軒	
		平安時代	堅穴住居跡1	灰釉陶器（墨書き土器1）・土師器			床面中央部に焼成窓を持つ堅穴住居跡	
		平安時代末～鎌倉時代初頭	掘立柱建物3	山茶碗				
		鎌倉時代末～室町時代初頭	土坑1	カワラケ				
江戸時代	掘立柱建物跡1	陶器（天目茶碗・播鉢）・磁器						

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第136集

星久保古墳群
(静岡空港横断道路榛原地区)

平成12年度 静岡空港県単独空港整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年12月27日発行

編集発行

財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡市谷田23番20号
TEL 054-262-4261代
FAX 054-262-4266

印刷所

黒船印刷株式会社
〒422-8033 静岡県静岡市登呂2丁目4-25
TEL 054-286-0236代